

漢詩神奈川第四十号特別記念号

神奈川県漢詩連盟二十年史

— この十年の歩み —

漢詩神奈川

第 40 号

神奈川県漢詩連盟
事務局

横浜市鶴見区岸谷
4-28-23-301

TEL-FAX
045-573-3045

発行人 香取和之
編集人 久川憲四郎

「神奈川県漢詩連盟 この十年の歩み」

次の十年に向かって力強い一歩を踏み出そう

神奈川県漢詩連盟会長 香取和之

神奈川県漢詩連盟(以下、神漢連)は

二〇〇六年(平成十八年)十月十四日に初代会長・故中山清氏を中心に設立され、今年で二十周年となります。先人の苦勞を振り返りながら、皆で盛大に祝いたいと思います。

中国の「貞観政要」という書物に、有名な語句として「創業と守成いずれが難きや」(新たに事業を興すこと、創業と、出来上がった事業を守り発展させていくこと、守成)のどちらが難しいか)があります。神漢連は今や明らかに「守成」の世代です。本年は、「どのように、神漢連の理念を守り発展させていくか」

香取和之会長



展させていくか」

について、全会員が考えて、決意を新たにする年だと思っております。

神漢連の目的は、規約の冒頭にも述べている通り、「神奈川県における漢詩の研究、普及並びに交流」をおこなうことです。この目的に対して、以下の三原則で歩んでいます。

一、多様な人材が集まり、その意見・経験が生かされるようにする。

二、「漢詩を学ぶ、漢詩で遊ぶ」をモットーとする。

三、毎年「漢詩入門講座」を開催して新規会員を迎え入れ、さらに同期漢詩サークルを結成する。

漢詩は「絶滅危惧種」と言われて久しいですが、神漢連は二十年前の創立時の会員の凡そ三倍の人員を現在も擁しています。会員は高年齢の方が多いですが、この方々が趣味と

して漢詩鑑賞・作詩を選び、そして豊かな人生を送ることの一助になっていることはお互いに誇るべきことと思います。

今後、人口減少、高齢者の就労による時間制約、学校での漢文・漢詩教育の変化など、社会構造の激変に伴い、厳しい社会環境が予想されますが、漢詩鑑賞・作詩が人生の素晴らしい趣味であることには変わりありません。まさしく、論語の「子曰、学而時習之、不亦説乎」(子曰く、学びて時に之を習う、亦た説ばしからずや)であり、ホイジンガの名著「ホモ・ルーデンス」(ラテン語で「遊ぶ人」の意)に説かれている通り、「遊びこそが人間活動の根源」です。

尚、「この十年の歩み」編集の目的・背景は、以下の通りです。

①神漢連は設立二十周年を迎え、設立経緯・趣旨や、これ迄の歩みを知らない会員が多数を占めるようになってきている。

②このような背景のもと、活動記録と共に活動趣旨が会員に分り易く伝わるように、「この十年の歩み」(二〇一六―二〇二六年)を編集する。

(「最初の十年の歩み」(二〇〇六―一六年)については、会報二十号特別記念号を参照) ③そして、神漢連の良き伝統が次の世代に伝わり、新たな活力を以って更なる展開を図る。

改めて、この編集目的を認識の上、次の十年に向かって力強い一歩を踏み出しましょう。

神漢連創立二十周年を祝う

全日本漢詩連盟会長 鷺野正明



神漢連創立
二十周年おめ
でとうござい
ます。

募集すれば参加希望者が殺到し、会の活動が継続して衰えないのは、風光明媚な神奈川であるという地理的な条件、美しい港などの観光地に多くの人が集まり文化の循環発展があるという文化的な条件、人が多いから漢詩に情熱をもつ人も多いという人材的な条件が融合して有利に働いているからです。

漢詩創作の伝統は、今の私たちが良い詩を作ることによって継承されます。未来の人々が今の私たちの詩を見る可能性があるかどうか、見た時にすばらしいと感動してくれるかどうか、それは今の私たちの作品にかかっています。未来に残る名作を残すべく、この今において、さらに共に楽しみながら、日々切磋琢磨していくことが大切です。十年後、今にも増して神漢連に日本を代表する多くの「詩人」が活躍していることを期待します。

立以来、着実に会員を増やし、多くの作詩者を輩出し、その勢いは衰えることがありません。成功の秘訣は、新聞に公告を出して新会員を募り、先輩が作詩法を指導し、シャレた「会」の名をつけて一年間の勉強が修了すると、次年度以降は会が独自に作詩活動を行うという、「神奈川方式」をとっているからです。創立してから二十年経ちましたから、いまは二十の同期の会がそれぞれ競い合って活動していることになります。総会では、「第〇期生〇〇会」の報告が延々と続きます。この活況は他の連盟・団体にはありません。

慶賀神漢連創立二十年

翔堂

金河至所景雲生

金河至る所に景雲生じ

風月常牽無限情

風月常に牽く無限の情

二十年來詩趣溢

二十年來 詩趣溢る

此應能使後人驚

此れ応に能く後人をして驚かしむべし

目次

「神奈川県漢詩連盟二十年史」の刊行にあたって

次の十年に向かって力強い一歩を踏み出そう

神奈川県漢詩連盟会長 香取和之……………1

神漢連創立二十周年を祝う

全日本漢詩連盟会長 鷺野正明……………2

この十年の歩み

概要……………4

寄稿……………7

会長時代の思い出……………8

事務局長時代の思い出……………8

事務局長時代の思い出……………8

漢詩入門講座と漢詩サークル

漢詩入門講座……………9

漢詩サークル一覧表……………10

各漢詩サークルの紹介……………11

金星干支会……………11

三七八会……………11

好文会……………12

詩游以文会……………12

五友詩林会……………13

岳精会漢詩研究会……………13

九詩期会……………14

千代田岳精会漢詩研究部……………14

十期会……………15

令和会……………15

志詩会……………16

逸語会……………16

既望会……………17
いななき会……………17
壺八会……………18
聚鳩会……………18

漢詩鑑賞

漢詩講演会……………19

漢詩鑑賞会……………20

鑑賞会A……………20

鑑賞会B……………20

鑑賞会C……………21

霧笛女子会……………21

大簡会……………22

鑑賞会D……………22

研修会、吟行会・オンライン吟行会

研修会……………23

吟行会・オンライン吟行会……………24

神辞会、自詠自書

神辞会……………25

神漢連図書館……………26

自詠自書……………26

広報、刊行

会報……………27

ホームページ……………28

神漢連YouTubeチャンネル……………28

渉外……………29

チラシ……………29

出版……………29

中国・台湾漢詩ツアー……………31

令和六年度全日本漢詩大会神奈川大会……………32

特記事項

竹林舎友……………33

お祝い：玉井幸久先生百歳……………33

故人の思い出……………33

石川忠久先生……………33

田原健一副会長・事務局長……………34

城田六郎先生……………34

桜庭慎吾先生……………34

高芝先生漢文法講座……………35

神漢連十五周年記念行事……………35

文部科学大臣賞を受賞して 高橋純子……………36

中国漢詩事情……………37

資料編

全国大会入賞・入選者一覧……………38

特別賞漢詩一覧……………40

役員、運営委員他一覧……………44

各年度会員数……………45

会計記録……………45

神漢連規約……………46

会員名簿……………48

付記

二十周年記念行事……………49

二十周年寄付者一覧……………50

あとがき……………50

神漢連二十年史「この十年の歩み」概要

会長 香取和之

最初の十年間(二〇〇六年～二〇一六年)の歩み

神奈川県漢詩連盟(以下、神漢連)は、朝日カルチャーセンター横浜で漢詩作法を教えておられた故窪寺啓先生の御指導と、全日本漢詩連盟会長の故石川忠久先生のご支援のもと、二〇〇六年(平成十八年)十月十四日に初代会長・故中山清氏を中心に七十八名で結成された。

故中山元会長は、「全日本漢詩連盟が発足してからはや三年を経過し、組織拡充ときめ細かな活動のために、各都道府県にも連盟をつくろうという機運が生まれてきました。相協力して、漢詩文化の振興は勿論、県単位でおこなわれています文化行事にも対応がのぞまれるわけです。関東地域でも、群馬、茨城、東京、千葉とあいついで組織が結成されてまいりました。こうした情勢の中で当県でも、昨年(平成十七年)秋より有志の方々と相談して準備に着手し、今年に入りましてからは準備委員が集まり具体的作業を進めて発会となった次第です」(「漢詩神奈川」創刊号)と述べられている。

驚くべきことは、当初から「初心者入門講座」(漢詩入門講座)、「研修会」、「吟行会」が

企画実施されており、現在にいたるまで継続されていることである。

その後、神漢連は順調に発展し、創立十周年(二〇一六年、平成二十八年)には、会員数二百三十八名(二〇一六年三月末)となった。漢詩サークルは一期十期と岳精会漢詩研究会の十一サークルになり、サークル交流会「バトル漢詩甲子園」も四回開催された。また新たに、漢詩鑑賞会として大簡会(輪講方式)を始め、「A」、「B」、「C」、霧笛女子会が順次発足した。

神漢連発足四年目には横浜開港百五十周年記念全国漢詩大会を開催し、さらに十周年には中華街とコラボして中華街・中華料理を詩題とした全国漢詩大会を開催した。神奈川清韻は第一集(八十八首)、第二集(百三首)を発刊した。また、神漢連叢書として、「七言絶句ここから一歩―佩文齋詠物詩選七絶抄」歩こう神奈川 漢詩八十景」を出版した。さらに、十年間途切れることなく年二回会報「漢詩神奈川」が発刊され、全国の漢詩連盟に先駆けてホームページを開設した。また、全国漢詩大会では二〇一二年に故石川省吾氏が文部科学大臣賞を受賞されるなど、多くの方々が入賞・入選されてきた。

尚、会長は初代故中山清氏から二代岡崎満義氏と引き継がれ、事務局長は、故田原健一氏に始まり、故桜庭慎吾氏、三村公二氏と引き継がれてきた。

神漢連の良き伝統

最初の十年間の歩みを振り返ると、神漢連は以下の三原則のもと発展してきたと認識している。

- 一、多様な人材が集まり、その意見・経験が生かされる。
- 二、「漢詩を学ぶ、漢詩で遊ぶ」をモットーとする。
- 三、毎年「漢詩入門講座」を開催して新規会員を迎え入れ、さらに同期漢詩サークルを結成する。

第一項の多様性については、趣味では詩吟や書道の愛好家など、現役時代は民間企業・役所・学校など、いわゆる文科系・理科系、男性・女性、ITに強い人・中国語に堪能な人など…。このような多様性があるので、各漢詩サークルには活気があり、また最近ではZOOMを用いた諸活動や七絶推敲表の開発・活用などに繋がっていると思われる。

第二項のモットーについては、私は以下のよう
に受けとめている。

①我々は漢詩を熱心に、且つのびやかにゆつたりと学び、そして豊かな人生を送るための一助としている。珠玉の詩句への感動、生活のうるおい、描写の妙に触れること、名所旧跡訪問の楽しみ…。

②漢詩を学ぶ活動のなかに、常に漢詩を楽しむ、遊ぶ要素を取り入れる。「オンライン吟行会」、「自詠自書」、「自詠自吟」など。

第三項は「金港方式」として、故石川忠久先生からお褒めの言葉を頂いたものです。

①毎年四月から五月に数回の「漢詩入門講座」を開催し、古今の名詩を鑑賞すると共に、「だれにもできる漢詩の作り方」を用いて、七言絶句を一首作れるようになる。

②やり方としては、講義と共に、神漢連の会員が数名の少人数グループ毎に実作指導を行う。

③更に、新会員が同期のサークルを作り、そこに作詩レベルの高い会員を講師として派遣し、作詩の学習を自主的に続ける。

このように、神漢連には諸先輩が築き上げたよき伝統があり、それを大切にしながら時代の変化にも対応している。

この十年間(二〇一六年～二〇二六年)の歩み

この十年間の歩みの詳細は各記事に記すが、本原稿ではその概要を記す。

一・漢詩入門講座と漢詩サークル

一般の人向けの漢詩入門講座は内容を見直しながら毎年四・五月に開催され、本年は第二十回となった。これに伴い漢詩サークル第二十期が発足した。漢詩サークルは神漢連活動の中核であるが、会員の高齢化などによる各サークル員の減少や、講師の高齢化による退任により、統廃合を繰り返して現在十六サークルである。

二・漢詩鑑賞

漢詩講演会を春の総会時と秋の二回開催しており、会員以外にも開放している。会員の漢詩鑑賞会としては、大簡会(輪講方式)を始め、「A」、「B」、「C」、霧笛女子会を継続すると共に、漢詩鑑賞入門講座(鑑賞会D)を昨年五月に開講した。これは以下の漢詩学習計画の一環でもある。

三・漢詩学習

漢詩学習計画としては、初級者(入会後数年を想定)、中級者(全国大会入選レベル)、上級者(全国大会特別賞受賞レベル)に区分して進めつつある。

①初級者…「鑑賞入門講座」の新設、さらに「作詩の為の漢文法」「搜韻の使い方」「七絶推敲表の使い方」等の講習会を定例化する。

る。

②中上級者…神漢連内での切磋琢磨と共に、全国漢詩大会へ積極的に応募することや、斯文会や二松詩文会など外部での作詩指導も受けるように勧める。

四・研修会、吟行会・オンライン吟行会

研修会はコロナ流行により開催されない年もあったが、近年は十二月開催と再び定着している。吟行会は準備の大変さから通年では実施しない事とし、ZOOMを活用したオンライン吟行会を十五周年記念行事として始め、年二回開催と定例化している。

五・神辞会、自詠自書

「神辞会」を発足させて、インターネットやAI、PC/モバイル端末ツールを整備して漢詩創作の一助とする取り組みを始めた。「七絶推敲表」はその成果の一つである。神漢連には長年の活動を通じて、漢詩鑑賞・創作に関する貴重な資料が蓄積されており、これらを体系化して「神漢連図書館」をホームページ内に構成した。「自詠自書」への取り組みとしては、同展示会を総会に合わせて年一回開催している。

六・広報、刊行

広報としては、会報「漢詩神奈川」を一月と七月の年二回発行して、神漢連の活動を分かり易く伝えると共に、出来るだけ多くの会員

の声が伝わるように努めている。

ホームページは大幅刷新して、神漢連の全分野の活動がリアルタイムで全会員に伝わるようになり、また会報バックナンバーなど過去の記録のアーカイブとして機能も果たしている。神漢連YouTubeとしては、漢詩講演会などの様子が登録されるようになり、参加出来なかった人も楽しめるようになった。

尚、漢詩入門講座や漢詩講演会のPRとしては、神奈川県や横浜市の教育委員会の後援を得て、分かり易く見栄えのいいチラシを毎回作成して配布することが定着した。

刊行としては、神奈川清韻は二〇二一年度に第三集(百四十首)、二〇二六年度に第四集(百四十四首)を発行した。また二〇二〇年度には「コロナ禍克服を目指して」漢詩集を発行した。神漢連叢書としては、「だれでもわかる七言絶句」ここから「上・下、及び」『平成の漢詩遊び』を出版した。

七. 特記事項

二〇二〇年二月勃発のコロナ流行は、行動制限により、漢詩サークル・鑑賞会の対面式例会の休会を何か月も余儀なくさせ、神漢連活動を大きく低下させた。しかしその結果、ZOOMの利用が一般化してその利便さが認められ、漢詩鑑賞会A、B、C、大簡会はZOOM方式に切り替わった。

この十年で特筆すべきは、全国漢詩の祭典で故城田六郎氏と和田肇允氏が各々二〇二〇

年と二〇二六年に、また全日本漢詩大会で高橋純子氏が二〇二五年に、文部科学大臣賞を受賞したことである。また、神漢連として二〇一八年に中国大陸、二〇一九年に台湾に漢詩ツアーを行った。十五周年記念行事ではオンライン吟行会、漢詩自由訳コンクールや記念グッズなど多くの新企画を行った。「令和六年度全日本漢詩大会神奈川大会」では神漢連会員一丸となって取り組み、盛大な式典、交流懇親会、吟行会を成功裏に完遂した。会員制度では、漢詩に学術的専門知識を有する先生方を特別会員として迎ええることにした。尚、詩力の高いベテラン会員は竹林舎友として顕彰し、後輩への指導をお願いしている。

八. 神漢連の運営

「神奈川県漢詩連盟規約」は二〇二五年に大幅な見直しを行った。

①若手会員勧誘の一環として、「U23会員」(会費無料)を新設する。

②九十歳以上の会員が継続し易くする為に、原則終身会員として新たな会費不要とする。

会員数は二〇二六年三月末で、二百三十六名と十年前とはほぼ同じである。会員の世代交代は否応なしに進んでおり、田原健一氏、城田六郎氏、桜庭慎吾氏はじめ多くの方が鬼籍に入られた。

尚、この十年間で会長は、第三代三村公二

会長、第四代香取和之と引き継がれた。事務局長は、高津有二氏、久川憲四郎氏と引き継がれた。運営委員会は毎月開催されている。理事会は年一回主として紙上審議で行われている。総会は年一回開催され、引き続き漢詩講演会を開催し、夜は会員同志の親睦を図る懇親会を行っている。

神漢連の年会費はこの十年間二千円に据え置かれているが、関係者のボランティア活動により何とか健全な収支を維持している。故田原健一氏からは多額の寄付を頂いて、田原基金を設立し、出版事業他に活用させて頂いている。また十五周年・二十周年記念事業など特定の大型イベント時には多数の会員から寄付を頂いている。

今後の課題

会員数は今後減少すると思われる、会の運営のスリム化が増々求められると予想される。また、会員及び各会講師の高齢化により、神漢連の運営は年々厳しくなると思われる。更に、サークル等での漢詩研修のレベルアップ、若年次のサークル会員による主体的活動、IT環境を駆使した運営効率化、若年層の会員勧誘と、課題は尽きないが、着実に進めて行きたいと考えている。

尚、このような環境にあっても、前述の「神漢連の良き伝統」に基づいて活動すれば、神漢連の将来には活路があると確信している。

寄稿…スマホは持たない

元会長 岡崎満義



私は先生運がいい。小学校一年のときの長谷先生、中学時代の田中弥寿助先生、高校時代の香川正晴先生、大学時代の田中美知太郎先生。社会人になっても、横浜の朝日カルチャー教室で漢詩実作を習った窪寺啓先生、文藝春秋編集長時代に、上智大学で広報委員になったとき、石川忠久先生に出会ったこと。

雑誌編集者としても、いい作家に出会った。松本清張、三浦哲郎、笹沢左保、永六輔、和田誠の諸先生。こんな好運があるだろうか。神奈川県漢詩連盟もそんな中で生まれた。神奈川の漢詩好きの人たちと、楽しい学習をつづけることができた。私は雑誌編集者時代、編集会議で感じたことは、自分の頭だけで考えたプランは、すぐ底をつくことだった。他人の頭を借りることが、私の解決法だった。とにかく人に会う。人に会って話を聞くのが編集者の第一の仕事だと思った。

始めて会う人にはまず手紙を書く。その上

で電話をする。作家の堀田善衛さんの奥様が「あなたはまず手紙をくれた方ね。私が責任もってエッセイを書かせます」と、ほめてくれたことがあった。ヨーロッパのある作家が「自筆の手紙を書くことは、人生の大事」と書いていた文章を読んで、私は深く同感。今もスマホは持たずに、通信手段は手紙と葉書。近くの郵便局に葉書と切手をよく買いに行くので、ときにアメ玉を一つくれる。もっとも、生命保険のおばさんには「そんな妙な我を張らずに、スマホを持ってみれば、人生も変わってきますよ」と、笑われている。

スマホ全盛時代になって、雑誌が売れなくなり、出版社は弱っている。スマホは雑誌殺しの親玉だから、私は持たない。スマホを通さずに、直接人と会って雑談をすることが、私の人生だと思っている。

(参考)社会的な浮力をつけよう

「神漢連十年の歩み」の刊行にあたって

(会報二十号の再録)

私が漢詩を学び始めたのは出版社をリタイアして三年目の六十五歳のとき。その後、全日本漢詩連盟、神奈川県漢詩連盟の創立にかかわる幸運を得た。漢詩にかかわることでは両手で受けてもこぼれるほどの果実をもたらした。

才能豊かな人材が神漢連に次々に集まって

くる様を、私は驚き、うれしく思い、手をたずさえて活動してきたことをありがたいと思っている。「漢詩を学ぶ、漢詩で遊ぶ」を神漢連のモットーとして、のびやかに、ゆつたりと活動できたと実感している。初代会長の故中山清さんの「誠実まじめ路線」をふみはずさないように、そこに遊びの要素も加えて進んでいく方向性がはつきりしてきたように思う。

スーパー少子高齢化単身者社会としての日本は世界のトップランナーで、もはやお手本とする国はない。手探りで生きのびる道筋を探していかなければならない。医療、年金、福祉の重みがずつしりと若い世代の肩にかかってくる。高齢者が社会的お荷物にならないためにどうすればいいのか。私は遊ぶことで社会的な浮力がついてくるのではないかと思っている。日本型のホモ・ルーデンス(遊ぶ人)の道を探索してみたい。神漢連の活動もその延長線上にある。一人遊びもよい。みんなで輪になって遊べたらもっと面白く、浮力も増すだろう。

こんど神漢連十年史を編んだのは、単に十年の歴史を記録するためではなく、温故知新、古きをあたためて新しきを知る、さらに未来に向けての活動スタイルを考えるためである。この十年史が会員のみなさん一人一人のチエをひき出し、「漢詩を学ぶ、漢詩で遊ぶ」のさらに具体的なスタイルを作り出す手立ての一つになってほしいと願っている。

会長時代の思い出



前会長 三村公二
二〇一七年から
六年間、会長を務め
たのであるが、会長
時代よりその前の
事務局長時代の方
が仕事したという
思いが強く、会長時

代の六年間、何をやったかと問われると、よく思い出せない。事務局長の時は自ら先頭に立って活動してきたが、会長時代は隠れた人材の発掘を一つの目標にしていた関係もあり、皆さんに仕事をお願いしてやって頂いていた為なのであろう。

岡崎前会長が引退される事が明らかになつた二〇一七年の理事会で、岡崎会長はご欠席で手紙だったが、後任の会長には三村、事務局長には高津を推薦したいと書いてあつた。会長候補にはもつと適任な方が沢山いらつしやつたので、正直な所その時は辞退するつもりであつた。所が、窪寺先生から皆が応援してくれるから引きうけなさい、といわれ、それまで事務局長として携わつてきた路線に従つて運営すればよいのだ、と思つて引き受ける決心をした。

先ずは岡崎前会長が提唱された「漢詩を学
 ぶ、漢詩で遊ぶ」を基本に置いて、神漢連の
 強い所、弱い所を今一度見直してみようと考
 えた。誰しもが認める神漢連の強い所、故石

川忠久先生にも褒められた「入門講座」と「鑑賞会」、さらには、会報、HP等の一層の強化・充実を図る事が課題であったが、よくよく見直してみると、例えば、鑑賞会A、B、C共に、高齢化に伴う責任者の交代、内容の変更の時期に来ていたので、その対策が必要であった。

一方、新しい取り組みとして、「スマホで漢詩」の言葉で代表されるPCをベースにした「神辞会」を立ち上げた。その結果、AIの活用
にいたるまでの様々な開発・提唱がなされた。

神漢連の弱い所は、漢詩を学問レベルで理解できる人材がいないう事であろう。この課題の強化策として、顧問の故石川忠久先生、（残念ながら期中に亡くなられたので後任の）鷲野正明先生、窪寺啓先生に加えて、市川桃子先生、後藤淳一先生、高芝麻子先生、独力で詩語集を作られた菅原武先生に「特別会員」になって頂いて助言を頂く体制を構築した。例えば、高芝先生に「漢文法基礎講座」を開催していただき、皆さんの漢詩基礎レベルのアップを図った。しかし、この体制の十分な活用がなされなかった事は残念であった。

在任中の最も大きな事件はコロナが蔓延し、対面での打ち合わせ・会合が開催出来なくなったことである。窮すれば通ずの例え通り、神辞会の人達の提案で、ZOOM会議が創設され、ZOOMホストも育ち、今では神漢連に定着して鑑賞会は全てZOOM開催になっている。怪我の功名というべきであろうか。

事務局長時代の思い出



前事務局長 高津有二
二〇一七年、事務局長のお話があった時、会社定年後に色んな趣味に手を出していたことと、果たして自分に出るかなという不

安もあつて、お断りしたのだが、神漢連創立以来、ご尽力してこられた故田原副会長からの心強い一言で、お引き受けすることとした。

三村会長のもとで六年間、役員の皆さんのご協力と会員の皆さんのご支援で何とかお役目を果たせたかなと懐かしく思い出している。

生憎とコロナ禍に遭遇し、それなりに活動に制約もあったが、故石川忠久先生とご一緒した吟行会、バトル漢詩甲子園、中国西安、敦煌、台湾の漢詩ツアー、高芝先生の「漢文法基礎講座」、スマホ・パソコン時代を迎えて、鑑賞会にZOOM方式の導入、神辞会の立ち上げなど、思い出は尽きない。

神漢連は、全日本漢詩連盟の中では最多の会員を有し、最も活発な活動を行っている県連である。会員の皆さんは、漢詩を学ぶことの楽しさを満喫していただき、県連としては漢詩文化の伝統を絶やすことなく、発展させていくために、全国の先頭に立って活動して頂くことを衷心よりお願いしてやまない。

漢詩入門講座と 漢詩サークル

漢詩入門講座

―「金河新様式」を模索して―



副会長 新井治仁

入門講座のこの十年を下段の実施状況表から、振り返ってみましょう。

まず、受講者数ですが、十一期から順調に応募者が増加の後、令和二年にコロナ蔓延の緊急事態宣言となり、長い警戒時期に入りました。世界的な規模での人流の停止、死者数の拡大は、二十一世紀の歴史に刻まれる出来事で、一時は「漢詩どころではない」と心配したものです。

それでも十五期、十六期と、何とか講師、参加者のご協力で講座日程の繰り延べなど織り込みながらサークル結成を維持することができました。この間ZOOMによる例会、連盟発行の「コロナ禍克服を目指して」詩集などで、フォローアップが行われたことが、一年次も欠かすこと無くたすきを渡すのに大いに役立ったと思います。

令和六年、NHKの「光る君へ」がブームとなり定員四十名をはるかにオーバーする応募

募をいただき、翌年までお待ちいただく盛況で、初めて男女比率も女性が多数となって、現代版紫式部志向の盛り上がりを感じたものでした。サークル入会率は各年次で異なりますが、近年確実に、定年退職者の方々でも第二の仕事を持ちながら、漢詩を趣味としてのご希望に多く接します。

また、従来にも増して詩吟、書道、書画などの経験者で、改めて漢詩を学び、融合一体化して、文化領域を拡大し、その見識を深掘りしたいとの思いで参加される方が増えていると見えます。

加えて、二十三歳以下の若年者向けに年会費無料化、ズームの土日開催など加入促進策を進めて、世代間交流、世代交代の加速をより具体化していくべく、会員諸氏から更なるアイデアをいただきたいと思っています。

現在も結成後のサークル人員の減少により、サークル合併は喫緊の課題となっています。今後、大胆にサークル構成をスリムにする。今後、大胆にサークル構成をスリムにする。とともに、サークル外会員にも作詩、鑑賞のネットワークを更に広げ、連盟内のいろいろな交流機会を設けることが求められています。

故石川忠久先生は神漢連十年史に、我らの先輩が連盟設立後、すぐに初心者入門講座を開設し、漢詩文化の涵養に尽力されたことを「金河新様式」と特筆されています。この十年でどこまで更に発展させられたか自信がないのですが、新たな詩友が誕生することに、「受け継いで良かった」としみじみ思うのです。

漢詩入門講座―10年の歩み―

受講年次	受講者数	卒業者数	サークル名称	サークル当初人数	サークル当初講師	サークル当初代表者
2017 (H29) 11期	12	12	詩林会	10	中島龍一・飯島敏雄	篠崎吉之
2018 (H30) 12期	20	8	干支会	8	三村公二・新井治仁	安田 茂
2019 (R1) 13期	25	15	令和会	14	水城まゆみ・松井秀人	竹村文孝
2020 (R2) 14期	25	不詳	志詩会	10	香取和之・牛山知彦	東島正樹
2021 (R3) 15期	17	不詳	逸語会	13	水城まゆみ・高田宗治	川喜田 康
2022 (R4) 16期	14	14	既望会	9	高津有二・白石信隆	内山早奈江
2023 (R5) 17期	26	20	いななき会	9	新井治仁・東島正樹	吉池 純
2024 (R6) 18期	40	28	壺八会	11	松井秀人・木村 孝	佐野輝美
2025 (R7) 19期	35	30	聚鳩会	16	久川憲四郎・高橋純子	北野ますみ
2026 (R8) 20期	24	19	二十期会	13	大森冽子・中村講二	吉田 登

漢詩サークル一覧

2026/3/31現在

開始年、区分	サークル名	会員数	代表者	指導者	開催日	特記事項
2007年(H19)・1期 2018年(H30)・12期	金星干支会	7	五嶋美代子	三村公二 新井治仁	奇数月 第2火	令和3年11月に、金星干支会として合流し4年が経った。昨年11月に琵琶湖東三山へ吟行の旅を決行した。
2008年(H20)・2期 2013年(H25)・7期 2014年(H26)・8期	三七八会	11	橋本孝一	中島龍一	奇数月 第3水	3つの会が一緒になった。「皆若い」つもり。会員の漢詩作成レベルは様々であり、人生経験も趣味も色々な人の集まりである。
2009年(H21)・3期	好文会	8	高津有二	玉井幸久	偶数月 第3木	令和8年12月に第百回例会を迎える。設立5年目で「好文会詩集」を発刊して、令和元年に第二集、令和7年に第三集を発刊した。
2010年(H22)・4期 2012年(H24)・6期	詩游以文会	8	大森冽子	—	偶数月 第3火	詩游会、以文会共に単独で十年以上活動後、令和7月4月に合併した。対面での会員の互評方式で例会を行っている。
2011年(H23)・5期 2017年(H29)・11期	五友詩林会	8	白石信隆	住田笛雄	偶数月 第2木	五友会は田原先生追悼詩集発行。詩林会は居酒屋で懇親会が恒例。高齢化などでメンバー減少し、令和5年の4月に両者が合併。
2012年(H24)	岳精会漢詩研究会	8	家吉幸二	香取和之	偶数月 第2水	定例会は、前回の例会時に頂いた「兼題」に基づき、一度も休まず対面で勉強してきた。優れた自詠はその場で自吟。漢詩は人生勉強。
2015年(H27)・9期	九詩期会	13	山口幸雄	水城まゆみ 高橋純子	奇数月 第2木	2017年中国江南漢詩ツアーを実施。5周年記念詩集を刊行。サークル員が諸橋記念漢詩大会で諸橋轍次賞を受賞。
2016年(H28)	千代田岳精会漢詩研究部	9	田川行雄	香取和之	偶数月 第1木	平成28年、漢詩作成基礎講座を多数受講し、当初30名で発足。批正後の作品はその場で吟じている。
2016年(H28)・10期	十期会	7	蔦 清昭	高津有二	奇数月 第3木	定例会は、自由題で提出された詩稿への批正を受けて修正詩稿を提出。会員はほぼ70歳代の十年間を一緒に研鑽してきた。
2019年(R1)・13期	令和会	9	中村講二	松井秀人	奇数月 第1火	令和元年に発足、翌年コロナ流行で休会。例会は参加者間で1対1批正を実施し、その後に講師が指導を行う。
2020年(R2)・14期	志詩会	7	東島正樹	香取和之 牛山知彦	偶数月 第3月	コロナ流行の年に漢詩入門講座を受講し、発足は翌年。詩への志は今も変わらず。サークル員が漱石記念漢詩大会で最優秀賞を受賞。
2021年(R3)・15期	逸語会	9	田内 隆	水城まゆみ 高田宗治	奇数月 第1火	定例会はコロナの時期を含めて一度も休むことなく、全て対面で行ってきた。毎回和気藹々とした雰囲気勉強している。
2022年(R4)・16期	既望会	7	内山早奈江	高津有二 白石信隆	偶数月 第2火	課題詩を中心に学習し、意見交換を活発に行う。令和6年度全日本漢詩大会神奈川大会ではサークル員が特別賞を受賞。
2023年(R5)・17期	いななき会	6	吉池 純	新井治仁 東島正樹	奇数月 第3木	本会は、諸般の事情で令和8年3月末をもって幕を閉じた。白駒の隙を過ぐるが若く3年という短い歳月ではあったが、学ぶ形と場であった。
2024年(R6)・18期	壺八会	9	佐野輝美	松井秀人 木村 孝	偶数月 第2火	「楽しくなければサークル活動ではない」をモットーに活動している。漢詩力の向上についても切磋琢磨していきたい。
2025年(R7)・19期	聚鳩会	15	北野ますみ	久川憲四郎 高橋純子	偶数月 第4金	課題詩を中心に学習。作詩の為の漢文法入門講座を受講。創立20周年式典では、高橋先生の文部科学大臣賞受賞作を有志で吟詠予定。
計	16サークル	141			奇数月7 偶数月9	

きらめく金星干支会

金星干支会代表 五嶋美代子

金星会と干支会が合流して今の金星干支会ができたのは、令和三年(二〇二二年)十一月のことでした。その頃はコロナ感染拡大で顔を合わせることも難しい状況が続いていたこともあり、合流には約一年の時間がかかりました。金星会は平成十九年(二〇〇七年)に発足した第一期のサークルでした。他方、干支会は十二期ですが、早い段階からメンバー四人の小さなサークルでした。合流後は、すっかり打ち解けて、早五年の歳月が経ちました。講師の三村公二先生、並びに新井治仁先生のご指導を仰いで、たゆまぬ研鑽を続けております。

そんな金星干支会が令和七年十一月、一泊二日の琵琶湖への吟行の旅に出かけました。湖水の光の中に浮かぶ竹生島、紅に染まる木々、歴史を物語る寺院の佇まい、どれをとっても素晴らしく、他方、夜は心行くまで歓談し、意義深い旅の思い出となりました。帰って後の研修会では、この旅を題材とした作品を披露しました。

漢詩を愛する仲間と巡り会えたおかげで、他では味わえない、このような楽しい経験ができました。これから金星干支会の活動が続いていくことに幸せを感じ、この場を作ってくださった神漢連に感謝いたします。



三七八会の歩み

三七八会代表 橋本孝一

「三七八会」は、旧「三水・七歩会」と旧「八起会」が令和五年に合同してできた会です。旧「三水・七歩会」も、旧「三水会」と旧「七歩会」の合同なので、計三つのサークルが一緒になったこととなります。「三七八会」という名称は旧各サークル名の漢数字を並べただけですが、実は読みに深い意味?があつて、「八」が片カナの「ハ(わ)」に似ているので「みなわかい」と読みます。その心は「皆若い」に通じ(させ)ます。全員で笑って決めました。

各旧サークルの会員が減少するなかで、合同するにあたってはどのサークルと合同したら良いか、例会開催日をどうするか等々の問題がありましたが、何とかこぎつけることができ、今では和気藹々とした雰囲気を楽しんでいます。

例会は奇数月の第三水曜日の午後開催していて、会員数は女性四人男性六人というところですが、皆さんの都合などもあり、大体七、八人前後で勉強しています。提出詩稿は中島先生からの兼題によるものと、自由題による詩稿も提出可です。例会後の、都合のつく有志でファミレスでする懇親会も欠かせません。会員の漢詩作成レベル?は様々であり、人生経験も趣味も色々な人の集まりですが、二ヶ月毎に顔をあわせて皆で話ができるというのは良い所ではないでしょうか。



好文会の歩んできた道

好文会代表 高津有二

好文会は、平成二十一年(二〇〇九年)の神漢連第三回初心者入門講座の仲間の会であり、名前の「好文」とは徳川斉昭の「弘道館賞梅花」の転句「好文豈謂無威武」から命名したものである。設立以来、二カ月に一回の例会は、コロナの一時期を除いて、休むことなく継続して令和八年十二月に晴れて第百回好文会を迎えることになっている。

当初、十二名でスタートしたが、退会、逝去された方があり、設立以来の方五名に新たな三名を加えて、現在八名の会員で活動を継続している。

設立以来十二年間ご指導頂いた城田六郎先生は第三十五回国民文化祭みやざき2020で文部科学大臣賞を受賞されたが、令和三年幽明境を異にされた。現在も白玉楼の中で、漢詩づくりを楽しまれ、私達の活動を温かく見守って頂いていることであろう。

好文会は、設立五年目で他のサークルに先駆けて「好文会詩集」を発刊して、令和元年に第二集、令和七年に第三集を発刊した。

作品集には、その間に各人が作詩した漢詩の中から随意に選んだ十詩を掲載しているが、夫々の作詩に至る経緯、作詩への思いを短文で記載することによって、会員として歩んできた人生の一コマを将来懐かしく思い出することが出来るものと確信している。

現在は、玉井幸

久先生にご指導を頂いているが、

令和七年八月に百歳を迎えられ、大変お目出度く、会員一同でお祝いを申し上げた。

平素はZOOMによる例会を実施しているが、令和八年四月は、対面でのご薫陶を賜り、会員一同これに勝る幸せはなく、お互いに、これまで以上に漢詩作りに刻苦勉励することを誓い合った。



この十年色々ありました

詩游以文会代表 大森冽子

四期詩游会は平成二十二年(二〇一〇年)に当初二十六名で発足。講師に住田先生、桜庭先生のちに田原先生にご指導をいただく。会場は県立公文書館。平成二十八年(二〇一六年)に「詩游会詩集」を、平成二十九年(二〇一七年)に「修善寺吟行詩集」を発刊する。毎年の吟行会是他サークルにも声を掛け、その都度「吟行詩集」を発刊する。その他の活

動として、小田原市の協力を得て、清閑亭での「観月会」を催すなど多彩な会員のおかげで活発なサークル活動を続ける。

六期以文会は平成二十四年(二〇一二年)十六名で発足。講師は中島先生、池上先生、桜庭先生にご指導をいただく。会場は、かながわ労働プラザ。平成二十七年(二〇一五年)に「三溪園吟行会」と初の「以文会詩集」を発刊。令和元年(二〇一九年)に「江の島吟行会」。令和六年(二〇二四年)に「以文会詩集第二集」を発刊。

両サークルとも退会、逝去される方々があり、詩游会は三名、以文会は五名と激減する。詩游会講師のリタイアがあるも活動は継続を維持する。以文会講師の逝去でやむなく、一時活動休止となる。存続を模索する中で、詩游会と合併することになり、令和六年(二〇二四年)十二月に詩游会の例会にオブザーバー参加し、令和七年(二〇二五年)四月に正式に合併にいたる。現在は、対面の互評方式で例会をかながわ労働プラザで開催している。



五友詩林会のこの十年

五友詩林会代表 白石信隆

五友詩林会は令和五年の四月に旧五友会と旧詩林会が合併して発足したサークルです。

旧五友会は平成二十三年度その名の通り五期生のサークルとして発足しました。当初は田原・高津両先生のご指導を、その後住田先生のご指導をうけています。十周年直後には田原先生の急逝をうけて、サークルの第一詩集を追悼詩集として発刊しています。

年に二・三回はメンバーの中野さんのお茶室で煎茶を頂きながら定例会を行うなどの優雅なひと時を設けていました。

一方、詩林会は平成二十九年に十一期としてスタートしました。その年の初心者入門講座は十周年行事のあおりで、七・八月の真夏の開催で、その故参加者も十二名と少なかったのですが、内十名がサークルに加入しました。中島・飯島両先生のご指導を受け、概ね川崎駅近くのマンション集会所で定例会、居酒屋で懇親会が恒例でありました。

コロナ期は両会共に、ZOOMを使い、定例会の継続に支障はありませんでした。しかし、高齢化等で、メンバーの減少が目立つようになり、合併しました。合併後は住田先生のご指導を受け、定例会と懇親会のセットで和氣藹々とやっていました。最近に住田先生の身体のご都合で、ZOOMでの定例会を主に、可能な時に対面という構図になっています。



漢詩の勉強は人生の勉強

岳精会漢詩研究会代表 家吉幸二

岳精会漢詩研究会は、詩吟の岳精流日本吟院総本部(川崎市川崎区)において、横山精真宗家のもとで、当時、神漢連の岡崎会長をはじめ桜庭慎吾先生、城田六郎先生など錚々たる漢詩の先生をお招きし、漢詩講座を開催して頂き、寺子屋と言われる小グループによる神奈川方式での指導を受けたのが始まりで、十三年となります。

私たちは漢詩を吟ずる勉強の中で、自詠自吟こそ自分たちが望むものだ、自分で詩作し

た詩を吟ずることこそ真骨頂だ、として学んで参りましたが、公にご披露できるような詩がまず出来上がらないのが現状です。

長らく城田六郎先生と三村公二先生(当初神漢連事務局長、現全漢詩連事務局長)との二人体制で懇切丁寧なご指導を頂いておりましたが、残念なことに五年前に城田先生がご逝去され、今年令和八年二月から三村先生が香取和之神漢連会長に交代され、熱心な指導を受けているところであります。

当初、五十名近い寺子屋方式の講座から会員も減って八名となっておりますが、兼題に基づいて出来上がった時の達成感、詩の良し悪しを抜きにして嬉しいものです。

例会に出席される横山精真宗家は、漢詩づくりは一出来上がるまで諦めないを言い続けています。詩吟と漢詩の人生勉強。

褒められた詩文は例会で自吟自詠、年に二回の親睦会は楽しいひと時です。



九詩期会の十年

九詩期会代表 山口幸雄

第九期の入門講座は応募者が五十名超という盛況で、九詩期会は二〇一五(平成二十七年)九月十日に、二十四名という大所帯で出発した。古田光子先生、大谷明史先生のお二人によるご指導だった。

大谷先生は二〇一八年十一月に川上修己先生と交代されたが、川上先生は二〇二一年九月に退任され、以後古田先生お一人となった。さらに古田先生の体調のご都合で二〇二三年七月には水城まゆみ、高橋純子両先生にご指導を仰ぎ現在に至っている。

二〇一七年十月には「江南漢詩ツアー」を企画・実施した。他サークルからの参加もあり総勢十三人。寒山寺や烏鎮観光、蘇州滄浪亭での現地漢詩団体との交流会、蘇州大学での講演会など盛り沢山で、四泊五日の予定が台風で五泊六日になるという突発事もあったが、楽しい旅で神漢連の海外ツアーの先魁となった。

二〇二一年に五周年記念詩集を刊行したときには会員数十三人となり、その後一人が退会一人が入会、現在十三人で活動している。

会員の高齢化は進んでいるが、会員の平賀さんがご住職の松田町の少林寺で吟行会を開催したり、二〇二〇年のコロナ禍にはオンライン例会に加えてオンライン忘年会を開催するなど、それなりに楽しく活動している。

活動十年を経て、二〇二五年の第十七回諸橋記念漢詩大会で会員の岡嶋さんが諸橋轍次賞を受賞したのを筆頭に、近年各種大会で会員の入賞が相次いでおり、歴代先生方のご指導のおかげと深く感謝しています。



早や十年経ちました

千代田岳精会漢詩研究部代表 田川行雄

千代田岳精会漢詩研究部は発足して今年で十年となります。

千代田岳精会には詩吟の岳精流日本吟院の部門ですが、詩吟をより深く理解することを目指して多くの会員が神奈川県漢詩連盟の基礎講座に参加しました。今、残っている平成二十八年八月七日「漢詩作成基礎講座 終了詩稿」には三十名の詩稿があります。基礎講座には多くの先生方に熱心に御指導いただいたのが思い出されます。

発足後は桜庭先生、香取先生に御指導いただいておりますが、諸般の事情で退会され

る方が出て、参加者が減ってきました。特に残念だったのは初めから熱心に御指導いただいております桜庭先生が亡くなられたことです。それ以降は香取会長が単独でご指導して戴いて居ります。

退会者が続きましたが、その後三名の新規入会者が有り現在八名で運営しております。そのうち三名は指導会に参加出来ないため、書面での参加となっております。全員詩吟の会のメンバーですので、毎回、香取先生の批評していただいた詩を吟じております。

終了後は近くで一献かたむけて、親睦を深めております。また、毎月の千代田岳精会幹部連絡会では、漢詩研究部の状況を報告し、あらたな会員の入会を目指しております。

今後とも皆様のご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。



面白みのないサークル名ですが

十期会代表 蔦 清昭

実は十三の候補名の接戦を勝ち抜いたサークル名なのです。「十は外せない」という強行意見に引きずられて・・・。

高津先生と川上先生のご指導で始まった初回の出席者は「十名」でした。

定例会は、自由題で提出された詩稿への御批正、御批正を受けての修正詩稿の提出、それを定例会で持ち寄り、再度のご指導と意見交換、というサイクルで運営中です。会員それぞれの作品に傾向や好みがみられます。波乱万丈の人生を送っているわけではないので、故郷の思い出、四季の移ろい、旅行先の印象、散歩での出会い、時に時事問題など、日常感じることが詠まれてきました。でき栄えはというと、「この程度の詩が出てくるのは、私の指導力がないからに違いない」と先生を嘆かせる状況から抜け出せていないのはお恥ずかしい限りです。一方、何名かは詩吟をなさっていて、カラオケの腕前はなかなかのものです。

コロナ後に、高津先生お一人のご指導と八名のサークル員の構成となり、現在は六名で活動しています。サークル代表も現在は四代目。会員はほぼ七十歳代の十年間を一緒に研鑽してきました。ご家庭の事情や健康状態等何らかの変化のある年代ですが、細く長くサークルが維持できることを願っています。



令和会の今日に至るまで

令和会代表 中村講二

令和元年の第十三期漢詩入門講座は二十五名が参加し、神奈川近代文学館にて五回開催された。令和会入会者は十五名(男性十一名、女性四名)、奇数月の第一火曜日に例会開催となった。代表世話人には竹村文孝氏が選任され、水城まゆみ先生と松井秀人先生にご指導いただく事になった。

翌年三月にコロナ緊急事態宣言が発令され、令和三年七月までは勉強会は休講し、自

宅学習で作成した詩題を講師に送付し批正後に返送いただく形で行なった。この間に講師は松井先生のための体制となり、会員は女性四名と男性一名が退会、男性一名が死去したため九名となる。

その後、例会場は横浜駅近くの横浜市社会施設「フクシア」となり、令和六年より代表世話人が中村講二に交代した。会員の大半が病を抱え、埼玉・群馬から横浜まで二時間かかる会員がいるので隔月の例会は令和七年一月より年六回を対面とズーム方式で各三回とし、体に負担が掛らぬ様にした。令和八年三月に二名が退会し現在七名となるも、松井先生の叱咤激励を受けながら漢詩創作に励んでいる。



第十四期志詩会「詩は志なり」

志詩会代表 木村 孝

「詩は志を言う」は詩に対する考え方を述べた奥の深いことばですが、そんな漢詩の世界に一步でも近づいてみようということ、サークル名を「志詩会」と名付けました。

二〇二〇年第十四回漢詩初心者講座は新型コロナウイルス蔓延のなか、何度か延期を繰り返し十月になってようやく全五回の講座が終了。そんな訳でサークルの結成もずれこみ、年が変った二〇二二年四月になってようやく第十四期「志詩会」がスタートしました。

香取、牛山両先生の指導のもと当初のメンバーは十人。初めのうちは「今回の詩こそ文句はないだろう」と胸を張って例会に臨んだものの、先生方の

の厳しい批評にすっかりへこまされ、毎回例会後の一杯でなんとか癒される。こんなことを何度も繰り返ししているうち徐々に自分の作詩の力量が分かるようになり、早いもので二〇二六年四月までに



三十一回の例会を重ねてきました。

この間、主会場をなかに区民活動センターから横浜市開港記念会館に移し、メンバーを少し減らして今日に至っています。活動開始より五年間ご指導いただいた香取先生、そして初代代表の東島氏にはたいへんお世話になりました。現在は男女三人ずつ計六人の小所帯で、年齢も四十代から九十代と幅がありますが、志は今も変わらず、お互いを尊重しあいながら切磋琢磨しています。

それぞれに楽しみながら

逸語会代表 田内 隆

当会は、二〇二二年(令和三年)の第十五期のサークルとして、同年七月に発足しました。名前の由来は十五期の「二五」を「いちご」と読み、安らかに楽しむ「逸」を用いて「逸語会(いちごかい)」としました。

会員は当初十三名でしたが、その後四名退会し、現在九名(男性六名、女性三名)で活動しています。代表者は、当初は川喜田氏でしたが、二〇二三年一月から田内に交代しました。講師は、水城まゆみ先生、高田宗治先生にご指導を頂いています。

定例会は、詩稿を毎回一人一首提出し、事前に批評頂いた内容を基に検討しています。詩題は、当初は自由題でしたが、二〇二三年五月から、季節に合わせた詩題を詠んでいます。

す。(二〇二六年一月「長松春雪」、三月「春曉偶成」、五月「緑陰読書」)

発足から約五年経ちますが、定例会は今年の五月までで通算二十八回開催し、コロナの時期を含めて一度も休むことなく、全て対面で行ってきました。会員は、皆個性的で楽しい方ばかりで、毎回和気藹々とした雰囲気での勉強しています。また、定例会の後は、有志での懇親会を行い、毎年一月には先生方を交えて新年会を開いています。

今後これ

まで同様に、水城、高田両先生のご指導の下、会員それぞれの個性に合う詩を、楽しみながら作っていききたいと思っています。



十六夜の月に希望を託して

既望会代表 内山早奈江

当サークルは一六期として発足し、今年で五年目を迎えました。「既望会」の「既望」とは、満月(望)を過ぎた十六夜の月のことです。満ちたその先もなお学び続けていこうという思いが込められているように思います。また、「既望」は「希望」と同じ響きを持ち、未来への願いも感じさせる名前です。偶然にも、発足第一回の例会の日は、ちょうど十六夜の月でした。

当初は十名の会員でしたが、現在では五名の会員で例会を実施しています。会場は当初は神奈川近代文学館での開催で、現在では神奈川県民センターで偶数月の第二火曜日に開催しています。

勉強会は課題詩を中心として、高津有二先生、白石信隆先生のご指導を受けながら作品を読み合い、同じ詩題でも異なる表現や見方から多くを学んでいます。サークル発足当初より質問や意見の交換



が活発で、時間が足りなくなってしまう事もしばしばあり、例会後の懇親会でも先生にお話していただく事もありました。懇親会は先生方も参加して頂いてほぼ毎回開催しています。

令和六年度全日本漢詩大会神奈川大会では、小島数子さんが特別賞である「神奈川県教育委員会教育長賞」を受賞されました。私たちにとって大きな励みであり、これからも既望会は一歩ずつ学びを重ねていきたいと思っています。

白駒の隙を過ぐるが若く

いななき会 吉池 純

令和五年四月一三日。私たちは第一七回「漢詩入門講座」を受講した。コロナ禍がまだ癒えやらぬ時期であったにも拘わらず、多くの漢詩愛好者が参集した。

いななき会は九名でスタートした。始めてほどなく、二か月に一度の定例会の合間に勉強会を設けることにした。これは効果があつた。例会に提出する詩稿を、まったくの初心者ながら皆でまずは回し読みをし、意見を述べあう。ただの感想である。それでも回を重ねるうちに、なんとなく様にはなってきた。手前みそながら、本サークルの面々はレベルが高かったように思う。時を追うごとに、漢詩創作の基本をグングンと吸収していった。

支えになったのが、講師の新井治仁先生の批評である。そこに示された実到的確な指摘と、簡潔で凛とした文体に、我々は皆魅了され、毎回それを心待ちにした。

神漢連第一七期いななき会は、諸般の事情で令和八年三月末をもって幕を閉じた。

白駒の隙を過ぐるが若く、忽然たるのみ。三年という短い歳月ではあつたが、サークルという学ぶ形と場があつたからこそ、まずはここまで来れたのだと思う。講師の先生、神漢連の皆様方には、満腔の謝意を示したい。これからは、それぞれが一会員として今後も学習を続けていくつもりである。



楽しくなければサークル活動ではない

壺八会代表 佐野輝美

壺八会(いちやかい)は令和六年度の第十八期漢詩入門講座の卒業生二十八名の内十一名にて発足し、令和六年十月八日に第一回例会を開催し、二年目を迎えています。その後家庭の事情で三名が退会、一名が新規入会し、現在九名のサークルで活動しています。例会は偶数月の第二火曜日午後石川町の労働プラザで開かれます。講師は松井秀人先生と木村孝先生にお世話になり、時を経て更に和気あいあいに満ちた集まりになっています。

作詩活動に加えて、横浜の名所と漢詩を楽しむ活動も行っていて、過去二回、金沢八景の名所と称名寺を訪ねています。世話人の私としては、サークル活動後の一献が好きなので折に触れて声をかけています。将来的にはサークルでの「吟行会」



の開催、「漢詩集」の作成をと密かに企んでいます。

手元に令和六年度の漢詩入門講座卒業詩集を大切に保存しています。読み返しますと作成時の新鮮な気持ちを振り返ることが出来ます。また、サークル仲間の漢詩力の向上を感じる一方で自らの不甲斐なさも感じることが出来ます。

「楽しくなければサークル活動ではない」をモットーに活動を継続していきますが、漢詩力の向上につきましても仲間との切磋琢磨を通じて取り組んでいけたらよいと考えています。

「聚鳩会」一番新しいサークル

聚鳩会代表 北野ますみ

十九期サークル「聚鳩会」の名前は、別々のメンバーから提案された「聚」と「鳩」を合わせたものです。メンバーは十六名。例会は偶数月第四金曜日にかながわ県民センターで開催されます。

講師の高橋先生は穏やかな語り口で丁寧に批評を進めてくださり、久川先生は細部にまで目を配りながら熱心にご指導くださいます。毎回の例会に向け多くの時間を費やして準備してくださる先生方には、感謝しきれません。

課題提出者も多く、批評時間が足りなくな

るほどですが、メンバーからも感想や意見が出て、活発でたくさんの学びのある例会となっています。

令和八年二月例会では、香取会長による「詩作のための漢文法入門講義」が行われました。例会の課題提出作品を題材にした具体的な解説で、漢文法への理解を深める貴重な機会となりました。続編も期待しています。

メンバーには詩吟をたしなむ方も三名おり、二十周年記念行事では、高橋先生の文部科学大臣賞受賞作「吐魯蕃旅亭」を合吟することになっています。先生の受賞のお祝いできて生徒としてとても晴れがましい気持ちです。

漢詩を通じて出会ったご縁を大切にしたい、聚鳩会メンバー間の親睦をこれから更に深めたいと思います。





熱心に聴く会場一杯の皆さん

漢詩鑑賞

— 漢詩講演会と漢詩鑑賞会 —

漢詩講演会

— 熱心な聴講者でいつも盛況 —

神漢連の漢詩講演会は、十年前から春の総会時と秋の十一月頃の年二回開催しており、神漢連会員だけでなく一般の方も聴講できます。神漢連の活動目的の一つは、「神奈川県における漢詩の普及ならびに交流」をおこなうことであり、その意味でも重要な活動です。

漢詩の学術的側面に詳しい著名な先生をお招きし、先生が提案された演題で凡そ一時間半から二時間、講堂で講演頂いています。二十年前の神漢連設立以来、毎総会後には故石川忠久先生が漢詩講演をされていましたが、ご高齢により二〇一九年からは市川桃子先生、そして二〇二三年以降は鷺野正明先生が行なっています。尚、二〇一十七年以降は秋にも講演会を開き、市川桃子先生・高芝麻子先生にお願いしてきました。ここ十年間の講演会は下記の一覧表の通りです。

各先生は、パワーポイントを使うなどして、漢詩とその背景など専門的な内容を分かり易く説明されており、講演は毎回好評です。講演内容は、会報「漢詩神奈川」にその度毎に掲載しています。また、二〇二一年秋の市川桃子先生講演以降は、講演の動画を「神漢連 YouTube チャンネル」にアップしており、当日会場に来られなかった方や、再度講演を視聴したい人へも対応しています。

(香取和之記)

年月日	講師	演題	会場	補足
2017年(H29)3月16日	石川忠久先生	陶淵明 詩と人生	横浜市開港記念会館	創立10周年記念漢詩大会
2017年(H29)12月6日	市川桃子先生	蓮の花に籠める思い	神奈川近代文学館	
2018年(H30)5月30日	石川忠久先生	白楽天の詩と人生	同上	総会後
2018年(H30)11月6日	市川桃子先生	遠い友 心の旅	同上	
2019年(R1)5月29日	市川桃子先生	李白「白髮三千丈」	同上	総会後
2019年(R1)11月13日	高芝麻子先生	漢詩の四季、日本の四季	同上	
2020年(R2)11月18日	高芝麻子先生	阿倍仲麻呂と唐詩人	同上	
2021年(R3)10月14日	市川桃子先生	「三国志」の英雄 曹操の悲哀	同上	創立15周年記念行事
2022年(R4)5月20日	市川桃子先生	漢詩に現れる情景「美」について	同上	総会後
2022年(R4)11月2日	高芝麻子先生	詩を求めて出かける詩人たち	同上	
2023年(R5)5月30日	鷺野正明先生	旅する杜甫	同上	総会後
2023年(R5)11月1日	高芝麻子先生	神奈川県の旅する漢詩	同上	
2024年(R6)5月30日	鷺野正明先生	花はいつ開くー漢詩と暦ー	同上	総会後
2025年(R7)5月29日	鷺野正明先生	漢詩の美しい言葉	横浜市開港記念会館	総会後
2025年(R7)11月6日	市川桃子先生	続「三国志」の英雄 曹操の思い	同上	
2026年(R8)6月5日	高芝麻子先生	杜甫と家族	同上	

鑑賞会A



白石信隆

サークルに属さない人達にも漢詩を楽しむ場をとの提案に、「作詩(タテ軸)・鑑賞(ヨコ軸)の均衡がとれた」漢詩グラフィックを描く事が必要」と応じた玉井幸久先生が率先して始められたのが、鑑賞会Aである。もう一つの金河様式(作詩と鑑賞)の始まりでもあった。

平成二十六年一月に始まり、唐詩を順次解説、孟浩然、李白、杜甫、白楽天、王維、杜牧と続いた。「誰にでも楽しめる鑑賞会」を目標とし、時代背景の中での詩人の生き様、喜怒哀楽に触れ、その足跡をたどる旅であった。しかし、ご年齢もあり、惜しまれつつも丸六年六十回を以って、令和元年十一月の最終講義(白居易の詩)で締めくくられた。

代わって、桜庭愼吾先生が「宋詩鑑賞会」という形で引き継がれ、第一回定例会が令和二年一月に開催されたが、その後新型コロナウイルス、暫く中止を余儀なくされ、翌令和三年一月、ZOOMにより本格的継続が可能となった。欧陽脩、梅堯臣、林逋、蘇舜欽、王安石などを紹介の上、じっくり時間をかけたのが蘇軾で、多量の資料を駆使して、終始熱意溢れる講義が展開された。しかし、病を得られてからは闘病しながらの講義が続き、蘇軾の最

終回を前に逝去された。蘇軾の最終回は三村先生による代講で、追悼講義を兼ねて行われ、「宋詩鑑賞」は全二十九回で終了した。

桜庭先生の急逝に伴い、鑑賞会Aを何とか継続しようと、急ぎ講師をお願いし快諾頂いたのが竹林舎の先生方と会長・副会長であった。唐詩・宋詩の如くシリーズとしてのお願ひには、準備期間もなく、せめて数回程度でとなった。中島先生の「漢詩の周辺」玉井先生の「四季の漢詩(九回)」香取会長の「楚辞」水城先生の「范成大・他」高津先生の「青龍寺の漢詩・空海・楊萬里」新井副会長の「大磯の漢詩」と各々別の切り口で、漢詩を解説頂いた。十月以降は三村先生の大シリーズ「中国の漢詩跡を巡る」(まず十回)を予定。

鑑賞会B



高田宗治

鑑賞会Bは平成二十六年から開始しているが、開設の動機を振り返ってみると、毎年「入門講座」で新しい会員が入会され、所定の「サークル会」に所属して漢詩の鑑賞や作詩の方法を学んでいるが、中には「サークル会」に所属しない方もいる。この人たちの「漢詩を楽しむ場」がないのが、そもそもおかしいこの思いから鑑賞会が始まったとさ

れる。鑑賞会Bの最初の教材は『唐詩選画本の七言絶句を使用し、輪読する会としてスタートした。解説には苦勞しながらも楽しく学び、平成二十九年三月をもって終了している。

五月からは新しく『聯珠詩格』(大野修作校閲)を使用し、漢詩の鑑賞と作詩の二部制としたが、令和元年四月に終了。五月からは『中国名詩集』(井波律子著)をスタートし、令和三年十一月をもって終了。令和四年一月からは再び『聯珠詩格』を使用し、漢詩の鑑賞と詩格に基づいた作詩の二本立てでスタートした。「第二冊」からはじめ「第三冊」まで学んだが、令和七年三月をもってようやく終了した。

令和七年四月からは『國譯漢文大成』の『三體詩』を教材とすることになった。当書は『唐詩選』『唐詩三百首』と並び称され、前書と同じく鑑賞と作詩に有用な書とされている。開始から早や二年目に入っているが、更なる詩力向上を目指している。

今回も前例に倣って「作詩の部」と「輪講の部」の二部制としたが「作詩の部」では詩の作り方を少し変えることにした。前回の定例会で学んだ詩の中から好みみの詩を選択し、その詩の韻字を用いて「次韻・用韻・依韻(又は自由詩も可)」の何れかから詩作するようにした。

「輪講の部」では従来通り二人体制で、各自四首(計八首)を担当し、今では既に教材の半ばを鑑賞し終えたところである。近年のAI普及により、詩の解釈や研究にも活用されつつあるので、この先が楽しみでもある。

鑑賞会C

新井治仁

館柳湾抄出の「佩文齋詠物詩選」から脚韻別にまとめた白文テキスト「七言絶句ここから一步」を基にして二〇一五年にスタートした絶句の講義と鑑賞の会です。

①詠物は自然から寺仏など広く唐代以降の代表作、

②詩語や典故の豊富さ、

③中国歴代の歴史、史跡、文物、宮廷と庶民生活など、鑑賞、作詩には共に有益な文献である。

当初は城田・飯沼・桜庭先生、次に住田・田原・三上先生が加われ、現在は中島・香取・高津・松井・新井の五氏に引き継がれている。途中二〇二一年二月より新鑑賞会Cとなり、前記「七言絶句ここから一步」で読み残した全七絶に取り組み、既に第五八回で全六九六詩を読み終えた。

毎回三十人前後の常連参加者だが、ズーム形式で白文の読み下しとその解釈の面白さを楽しくしており、サークル若手世代も徐々に増え、詩語の探索、典故の活用など作詩への応用に役立てている。時に、講師の説明に鋭い異見や質問が提示され、修正、再検討も行われ、親密且つ密度濃い議論が楽しめるのもこの会の魅力と言えよう。

最近では、各自の予習や検討の典拠となるウェブサイトの「搜韻」やAIの超速の深化も新たな展開で、これらを慎重かつ大胆に活

用すべきだろう。また、成果物として参加会員に講義録最終稿を配布し、詩力向上、鑑賞の再読に役立てているが、今後後進による「七言絶句ここから一步・第二弾」として連盟書籍の刊行に繋がることを願っている。
(追記)当初の「鑑賞会C」の講義内容は、
・だれでもわかる七言絶句ここから一步
(上)(二〇一九年)
・同(下)(二〇二二年)、として出版した。
「新鑑賞会C」の講義内容は、
・御定佩文齋詠物詩選―七言絶句集第一冊
・同第二冊として、HPに登録されている。

霧笛女子会



副会長 水城まゆみ
霧笛女子会は偶数月の第一火曜日に開催されます。平成二十七年二月頃始まり今年で十二年目に入りました。

古田光子先生が隠退されてからは水城と横溝比呂美さん、大森冽子さん、柴本信子さんが担当されています。内容は「成島柳北の幕末維新バリ見聞記」「梁川紅蘭と星巖の漢詩」「一休宗純の漢詩」「かな文字の源流」「かな文字の解説」等です。令和八年度二月は水城が竹添井井の「棧雲峡雨日記」を紹介しました。参加者は毎回八名〜十名位です。関心がある方は

ご連絡下さい。

(会報三十一号(二〇二二年)からの抜粋)

偶数月の第一火曜日に開催されます霧笛女子会は、平成二十七年二月頃始まり今年で八年目に入りました。古田光子先生より詩経の「桃夭」から始まり、白居易の「議婚」まで、主に女性の人生を詠じた詩を講義して頂きました。「王昭君」「班婕妤」「蕉仲卿妻」「長恨歌」等、数奇な運命をたどった女性の生涯を歌った漢詩は、日ごろ七言絶句ばかりに親しんで、あまり読んだことのない古詩を紹介していただき、毎回興味深く鑑賞させて頂きました。

令和二年頃よりコロナが蔓延し、昨年と一昨年は年に一回しか、開催できなく大変残念な事でした。先生にはこれからは、地域の皆様に講義されている、枕草子など日本の古典と漢詩についてお話を毎回やっていただくことになり、嬉しく思っています。



大簡会のご紹介

高津有二

平成二十二年(二〇一〇年)、第25回国民文化祭・岡山2010が岡山県浅口市で開催され、併せて漢詩大会も開催された。

その年に岡山県出身で「昭和最後の漢詩人」と言われた阿藤伯海(雅号、大簡)の漢詩集である「大簡詩草」が復刻発刊された。

阿藤伯海は、一高教師を退官後は郷里岡山に帰り、岡山大学教授任官を断り、生家で悠々自適の漢詩詩作の生活を送ったそうである。「いい機会だからみんなで読んでみようか」と当時の神漢連の田原事務局長を中心に話が持ち上がり、その勉強会の名前を阿藤伯海の雅号からとって「大簡会」と名付けたそうである。

神漢連叢書「七言絶句ここから一步」のまえがきに当時の岡崎会長が書かれた文章に「漢詩・大簡村の村長は酒井謙太郎さん、助役は飯沼一之さん、収入役は城田六郎さん、それぞれ余人をもって替え難い人物の下で、村民は楽しく勉強に励んでいる」と記されている。「大簡詩草」は、二年余りで読み終えた。お次は?と思案投げ首のところ、モノ探しの名人の住田笛雄さんが、館柳湾の「佩文齋詠物詩選」を探してきて、コピーで教科書を作り、これを教材として輪読会を続けることになった。爾来、十年以上経過したが、コロナの頃に一時中断した後、現在はオンラインZOOM方式で勉強会を継続している。

漢詩鑑賞会Dへの思い

竹林舎 中島龍一



漢詩入門講座は二十年になりました。半数は鑑賞だけを希望する人です。最近の新人会員を対象に、漢詩鑑賞事

典(石川忠久)を用いて月一回の鑑賞だけの講義を始めています。一回で五首、七言絶句主体ですが、質疑応答にも時間をかけています。

講師の立場としては、五首の選択に工夫を要することです。一首を紙一枚に要約しています。教本は四百首の詩を古い時代順に並べていて、全部が名作ですが初心者に分かりやすい七絶の名詩を選び出し、徐々にそれに似た律詩、古詩をまぜたり加えたりします。杜甫には七絶がほとんど無いとか、唐詩は感情表現が多いので、思考表現や日常生活を詠う宋詩をまぜるとか、教室の半数は女性なので女性詩人の詩を他の本から引いてくるとか、江戸明治の日本人の漢詩を入れるなど変化をつけています。

中国王朝の歴史、北方民族・胡人の話などの資料も加えて紹介しています。詩の鑑賞には、時代背景や地名の場所を知ると意味が分かります。幸い生徒との応答が活発なので、講師としては良い雰囲気を作り難く思っています。

漢詩鑑賞会Dのお勧め

壱八会 佐野輝美



鑑賞会Dは漢詩鑑賞の入門講座として二〇二五年六月に新設された講座です。講師は大ベテランの中島龍一

先生へお願いしており、講義内容は本頁中段にて先生が説明されている通りです。毎月第一水曜日に石川町駅近くの「かながわ労働プラザ」にて対面方式でわかりやすく解説頂いております。

漢詩創作においては、「知識」を広めることが重要とされています。そのために必要なものとして「語彙」と「典故」がキーワードとなります。中島先生の解説では中国・日本の歴史、地理的な位置づけを先生独自作成の資料等で詩を解説いただくことで、「語彙」と「典故」を意識せずとも少しずつ身につけることができます。

開講当初は緊張のためか、質問も少なかったものの回を重ねるごとに質問も出始め、和気あいあいの雰囲気となってきています。会員は現在三十名、十九期が二十名、その他が十名の登録となっています。私自身は漢詩創作の一助となればと思ひ応募したのですが現在では中島先生の多岐に渡る漢詩の解説をとっても楽しみとしています。漢詩鑑賞へご興味のある方は是非参加願います。

研修会 吟行会 オンライン吟行会

研修会

白石信隆

研修会は、神奈川県漢詩連盟発足時、それも準備活動の早い段階で、「初心者入門講座」「吟行会」となれば二本柱として位置付けられて始まった伝統ある行事です。

その名の通り、会員の詩力向上を目指す事が第一であったと思いますが、併せて、会員相互の啓発と、世代の違いやサークルへの参加の有無を乗り越えた交流・親睦の促進をも企図したものでありました。

そこへ、いち早く俳句の世界で広く行われている「選句会」の方式を採り入れたことが、遊びの要素を加味しながら、その目的を果たすことを容易にしたと言えそうです。

匿名の投稿詩の中から、推薦詩を投票し合い優秀を競うと同時に、その結果を伏せたまま、忌憚なく議論し合うというやり方が参加者の活発な発言を引き出し、意見交換・相互交流に役立っていると思われます。

この方式は、「この十年間」も変わらず踏襲されてきました。研修会は人気投票という



開催年	開催月日	参加者	高得点者
平成29年	①11月8日(水)	15名	横溝比呂美
	②11月14日(火)	15名	三村公二
平成30年	①10月19日(金)	15名	芝 公男
	②10月24日(水)	15名	岡嶋宣昭
令和元年	①10月23日(水)	12名	芝 公男
	②11月7日(木)	11名	五嶋美代子
令和2年	コロナのため開催せず	—	
令和3年	コロナのため開催せず	—	
令和4年	4月21日(木)	19名	木村孝(優秀賞) 細江利昭(優良賞) 五嶋美代子・白石信隆(佳作)
令和5年	12月20日(水)	16名	岡嶋宣昭(優秀賞) 木村 孝・大野若人(優良賞)
令和6年	12月18日(水) (かながわ労働プラザ)	25名	木村孝(優秀賞) 大野若人(優良賞) 高橋光代・成澤きよ子・細江利昭(佳作)
令和7年	12月19日(金) (かながわ労働プラザ)	20名	福田忠夫(優秀賞) 細江利昭(優良賞) 向井恒泰(佳作)
令和8年	12月18日(金) (予備日)12月23日(水)	—	

注：令和5年以前の会場はすべて神奈川近代文学館(山手)

側面はありますが、それを乗り越えて今も十分に役割を果たしていると思われます。

しかし、十周年行事終了後は、一回あたりの参加者が減っています。平成二十五年春の参加者六十二名(ピーク)には遠く及びません。これに拍車をかけたのが、コロナ禍での二年の空白です。コロナ後は、二日に分ける必要のない参加人数で推移しています。また、参加メンバーの固定化も気になるところです。研修会の趣旨・内容ひいてはその楽しみです。

が、比較的新しい会員には必ずしも十分に理解されていないのではないか、というご指摘もあります。啓発についての工夫がさらに必要なのかもしれません。

なお、令和五年以降は十二月実施となり、神漢連年末最後の対面イベントとして恒例化しています。一日の開催としては十分なメンバー数で充実した意見交換をし、終了後は懇親会で盛り上がり、上級者・初級者の別なく交流の実を上げ、歳の納めとしています。

吟行会

新井治仁

連盟内で、自由で闊達な交流を促進して、吟行会は、サークルの枠を超えて詩友の拡大、作詩と鑑賞の土台作りに大きく寄与してきた。

平成二十八年の「横浜港一周クルーズ」は、心地よい船旅に詩心を動かされ、平成三十一年の「大磯」吟行では、この地の文芸とのかかわりを改めて振り返り、西行、藤村の史跡に思いを馳せた。

故石川忠久先生の提出句への即妙なコメントと柏梁体連句のスピーディーな捌きに瞠目したのも良い思い出。その後、コロナ蔓延が長引き、実吟行会に代わってズームによる事前投稿の形式のオンライン吟行がスタートし、試行錯誤の結果、現在のスタイルで定着し、二月、八月の二回開催となっている。

オンライン吟行会

薦 清昭

令和二年(神漢連十四周年)から二年間のコロナ禍は神漢連活動にも大きな影響を与えました。その年の緊急事態宣言を受け、テレワークの開始とともに世間ではZOOMが一気に広まりました。参集しての活動が妨げられた中での行事をどう運営するかが、十五年記念行事の課題となり、漢詩鑑賞会、サークル定例会、さらには運営委員会などの活動

を、対面ではないにせよ「顔を見ながら」継続できたのはZOOMの効用でした。

インターネットを利用しての「オンライン吟行会」は十五周年記念行事の一つとして企画されました。本番では、併催したハガキ投句を含めた参加者は六十二名でした。ネット投句とハガキ投句のダブル投句の参加者もありましたが。

初めての試みでもあり、諸先生と運営委員の方々のご協力を得て十回のトライアルを実施しました。実地吟行会での短時間で作句する即興性を保ちつつ、参加者がワイワイやりながら句を並べたり、参加者の投票で表彰句を選んだりする、など、ZOOMならではの特徴を加えてはどうか・等々貴重なご意見を参考にしながら無事本番を終えることができた。

現在は、下の表のように年二回の定例行事として定着しています。若干の変更を経て、普段作詩する自宅の環境で一句、それもそのまま七絶に應用できるようなルールに従った一句を、やや時間をかけて作り投句する方式になっています。ZOOM会議当日は、ご指導の先生による連句構成と優秀句の選定、それとは別に参加者の事前投票による人気句の選出も恒例となりました。また、サークル横断的、かつサークルに所属していない会員も参加する行事なので、参加者全員のコメント(作句の狙いや苦労話)、個別の句に対する先生のご指導を皆が共有する機会にもなっています。

吟行会・オンライン吟行会実施状況一覧

実施年・月日	形式	吟行場所・テーマ	連盟参加者	連句ご指導
2016(平28).05.12	実地吟行	横浜港一周クルーズ	35名	石川忠久先生・窪寺啓先生
2018(平30).09.27	実地吟行	横須賀「戦艦三笠」	28名	石川忠久先生
2019(平31).11.06	実地吟行	大磯「鳴立庵」・「島崎藤村終焉邸」・「西行史跡」等	43名	石川忠久先生
2021(令3).10.12	ZOOM/郵送	「鎌台今昔」及び「初秋函嶺」	62名	三村会長・中島、水城両副会長
2022(令4).3.28	ZOOM	「千鳥ヶ淵」	28名	水城副会長・飯島副会長
2022(令4).8.31	ZOOM	「尾瀬散策」	25名	香取会長・水城副会長
2023(令5).2.27	ZOOM	「梅林春信」	29名	香取会長・水城副会長
2023(令5).8.24	ZOOM	「横浜夏景」	25名	香取会長・水城副会長
2024(令6).2.26	ZOOM	「港」	30名	香取会長・水城副会長
2024(令6).8.22	ZOOM	「長安」	28名	香取会長・水城副会長
2025(令7).2.24	ZOOM	「雪国」	26名	水城副会長・新井副会長
2025(令7).8.30	ZOOM	「小笠原諸島」	27名	香取会長・新井副会長
2026(令8).2.23	ZOOM	「修善寺」	24名	香取会長・新井副会長



ます。
会議のZOOM日程が合わない方向けに、今年度夏のオンライン吟行会からは投句のみのご参加も受け付けるよう、変更されています。(吟行会の結果は左のQRコードから)

神辞会 神漢連図書館 自詠白書

神辞会

自分達で作るしかなかった仕掛け

薦 清昭



神奈川漢詩連盟の活動インフラの一つ「ホームページ」は発足直後から設置され、豊富な情報発信がなされて

いました。東京都在住の小生が神漢連に越境入会したきっかけは、たまたまホームページを覗いたことでした。入会した時はすでに十年の情報発信の実績があり、それに加え「パソコン、スマホ、インターネットを漢詩創作にも利用しよう」という、現在の神辞会につながる活動が検討されていた頃でした。先輩方の先見の明と奉仕精神が、今に到る活発な連盟の活動に繋がっています。

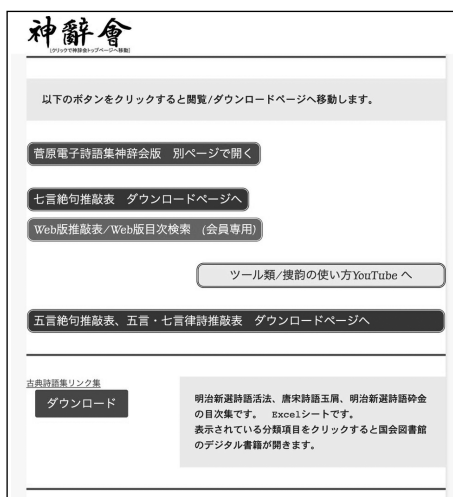
瀧川様(好文会)をリーダーとして「PC漢詩情報交換会」が発足したのは二〇一七年九月でした。ネット上やデジタルツールに漢詩創作に役立つものがどれだけあるか、の情報を

交換する会議体でした。当時書道の課題であった漢詩を自分でも作ってみたい、と漠然と思いつながら一年間ネットを漁った上で神漢連に入会したので、状況は理解しているつもりでした。つまり満足できるものはネット上にはほとんどない、平仄チェックツールも詩語集も中途半端。漢詩の膨大なデータベースである「搜韻」がやつと知られるようになる頃の話です。

当時すでに故城田六郎先生が自前の詩語集を作り始められていたことを後に知りま

した。実用に足る数の詩語を網羅した神漢連の詩語集を作ること、ちゃんとしたチェックツールを作ることが大まかな計画となり、二〇一八年にはその実行部隊として神辞会が発足しました。牛山氏(九詩期会)が共同リーダーになり、神漢連で、海のように広く深い電子

辞書Ⅱ神辞海、を作る、担当するグループは神辞会、が会の名前の由来です。膨大な詩語をどうやってデジタル化するのか、著作権はどうクリアするのか、の高いハードルを超えることができたのは菅原武先生のおかげです。当時ベストセラーだった「漢詩詩語辞典」の電子データを、なんと無償提供いただいたのです。日本における漢詩普及のため、との先生の精神を、頂いたデータと一緒に神辞会



は引き継いでゆきます。菅原電子詩語集神辞会版は一般公開されており、神漢連ホームページから利用できます。

一方城田先生が始められた自前の詩語集作りは、その後瀧川氏を中心に着々と語数を増やし、今や世界最大級の詩語データベースとして、会員専用ページで利用できるようになっています。

「中途半端なチェックツールしかない」という不満に対しては「じゃ、作ってみたら」ということに。最大の不満は

「これは両韻字だから自分で調べてね」と突き放すツールがほとんどだったこと。平仄は語義によって決まるので、詩語のレベルで確定するはず。漢語大詞典掲載語のうち約四十万の主要語の平仄を調べて内蔵し、これを参照すればよい。双声語、

疊韻語や虚字詩語など特徴ある詩語も区別すれば、詩語にどれだけ気を配って作られた漢詩であるか、なども判断できます。「七絶推敲表」はこのような考えで作られています。

インターネットやデジタル機器を漢詩創作に生かす、という課題から発足した神辞会ですが、定例会ではすでに五年前からAI漢詩がテーマとして取り上げられています。今後AI漢詩はどうなっていくのでしょうか?

興味のある方は年二回届く神辞会定例会のご案内への返信で参加をお申し込みください。ツール類や搜韻の使い方などを定例会で取り上げていますが、対面講習も行っています。ご希望の方は世話役までご一報ください。

神漢連図書館

「忘れないために」

薦 清昭

神漢連の「漢詩入門講座」で「漢詩が作れた!」と感激なさった方は多いのではないのでしょうか。丁寧なご指導と資料。忘れていませんか? 作詩経験を重ねれば良い方向に進む、とは限りません。ファイルの底から引張り出さなくとも神漢連図書館の「講習会等資料」にアクセスすれば読み返せます。

会員の漢詩集(神奈川清韻)、先生方の漢詩集・著作、など身近な方々の漢詩を読むこと、鑑賞会の成果物を読むこと等々、漢詩上達の「手段」「多読」をサポートしています。

国会図書館のデジタル化計画が急速に進んだ時期であったのが幸運でした。多くの漢詩関連書籍をインターネット経由で読むことができます。国訳漢文大成の全巻、すぐに役立つ漢語大辞典などの辞書サイト、漢詩隆盛の頃書かれた詩話などもインターネットを経由して読むことができます。これらの外部のデータは、作成者を尊重してそのサイトへ飛んで、そこで利用する形式になっています。

自詠自書の会

「漢詩で遊ぶ漢詩人の嗜み」をより身近に!

牛山知彦



自詠自書の会は、神漢連創立十周年の前年に設立され下表のとおり、作品展開催等の活動を継続しています。

作品展には出品者の力作が展示されて、サークルを超えた参加者交流の場となっています。また、一般公開されることによって、神漢連活動の広報の機会にもなっています。

設立は、金星干支会の上田尤子さんほか同志の強い意志で実現されました。当初は書道が得意な方達の参加がどうしても多かった訳ですが、その後は以下の取組みを積極的に実施して、その裾野を広げて多くの会員が漢詩をより楽しむ自詠自書の輪を広げることを目指しています。

令和五年からは書道未経験者に向けて「自詠自書入門講座」の開催を始め、令和六年からは作品展直前の「錬成会」も開催しています。また、神漢連HP内に「自詠自書の会」独自のページを作成して、作品展写真等を掲載しています。令和七年にはフォト漢詩等の出品も受け入れて、共に「漢詩で遊ぶ」楽しみの拡大を図っています。

行事名	期日	会場	参加	作品数	特別賛助出品	
第1回作品展	2015/5/20~23	エリスマン邸	13名	17作品	窪寺貫道先生	
第2回作品展	2017/3/16~17	横浜市開港記念会館	20名	33作品	石川岳堂先生	窪寺貫道先生
第3回作品展	2018/5/30~6/3	大佛次郎記念館	21名	21作品	石川岳堂先生	窪寺貫道先生
第4回作品展	2019/5/25~30	大佛次郎記念館	21名	22作品	石川岳堂先生	窪寺貫道先生
第5回作品展	2020	コロナ感染症拡大により延期				
第5・6回作品展	2021/10/20~24	県民ホールギャラリー	24名	42作品	石川岳堂先生	窪寺貫道先生
第7回作品展	2023/5/28~6/1	大佛次郎記念館	12名	13作品	故石川岳堂先生	
第1回自詠自書入門講座	2023/8/13、27	横浜市社会福祉センター	9名			
第1回錬成会	2024/4/18、5/5	横浜市社会福祉センター	13名			
第8回作品展	2024/5/29~31	大佛次郎記念館	18名	19作品	故石川岳堂先生	
第2回自詠自書入門講座	2024/8/11、17	横浜市社会福祉センター	7名			
第2回錬成会	2024/5/3、5/5	横浜市社会福祉センター	14名			
第9回拡大作品展	2025/5/28~29	横浜市開港記念会館	26名	34作品	故石川岳堂先生	鷺野正明先生
第3回自詠自書入門講座	2025/8/11、17	横浜市社会福祉センター	3名			

広報 刊行

会報「漢詩神奈川」の発行

—会報で繋がっている会員へ—

会報「漢詩神奈川」は、神漢連創立直後の二〇〇六年(平成十八年)十二月十五日に創刊号が発行され、それ以来年二回の発行が続いている。

創刊号から第九号までの会報を担当された田原事務局長(当時)によれば、「パソコンの「ワード」を勉強して悪戦苦闘し、A4の紙に字数行数を整えた三段を缺で切って貼り付け、表裏の版下を作って近所の文房具屋さんに持ち込んで大量コピーしてもらっていた。」そうである。奥さんも巻き込んで悪戦苦闘された姿が目につかぶようである。当初から留意されたことは、「絶えず頭にあったことは、会報でしか繋がっていない会員の存在であった。そういう一般会員の方に漢詩への関心を少しでも呼び覚まし、そこにどう連盟を意識させるかであった。」とのこと、これは現在まで変わることはない編集大原則である。

第十号(二〇一一年七月)からは複数人の編集体制となり、三村・中島・吉岡(以下、敬称略)の三名が編集を分担して、印刷を専

門の業者に委ねて印刷の鮮明度がアップした。尚、二〇一四年からは神漢連の全会報が、HPで読めることになった。

第十七号(二〇一五年一月)からは、主担当川上、編集委員香取の体制へ移行して行つた。

第二十二号(二〇一八年一月)からは主担当香取、編集委員牛山・大森の体制となり、以下の編集方針で進めた。

- ・誌面を、①一面の会長の挨拶・方針、②連盟の行事(総会、漢詩入門講座、漢詩講演会、吟行会・オンライン吟行会、研修会など)、③会員の活動(主として漢詩サークルと漢詩鑑賞会記事)、④会員だより(会員の寄稿)、⑤全国大会での入賞入選詩、の五つに大きく分けて読み易くする。
- ・漢詩サークル、漢詩鑑賞会、会員だより等、会員の活動と声を積極的に紹介する。
- 例えば、神漢連創立十五周年記念行事での「私の好きな漢詩」アンケートに基づき、回答者から何故その詩を選んだのか、またその思いは何かなど、数号にわたり計二十名以上の方々に各一段の記事を書いて頂いた。また女性会員に記事を書いて頂くように積極的にお願いした。
- ・漢詩作法や鑑賞力向上への手助けとなる情報を提供する(小特集として、「漢詩鑑賞入門」、「年賀状の漢詩」、「漢詩の為の漢文法」、「漢詩作法教室紹介」など)。また、漢詩関係の図書紹介、先人の漢詩への取組み紹介(私と漢詩)、全国漢詩大会の情報提

供等を行う。

第三十二号(二〇二三年七月)からは、主担当東島、高橋他の編集体制となり、中国駐在の会員松田奈月さんに「現代中国の漢詩事情」を連載してもらうなど、新たな紙面作りに取り組んだ。

そして、第四十一号(二〇二七年一月)からは主担当佐野、高橋、中村の編集体制で進めようとしている。

その他、神漢連十年史(会報二十号)、神漢連十五周年記念行事(二十九号)、全日本漢詩大会神奈川大会(会報三十五号)、神漢連二十年史—この十年の歩み(会報四十号)と特別編集の会報も発行してきた。

会報を考える上では、神漢連十年史(会報二十号)に田原副会長(当時)が記されていることは絶対忘れてはならないと思われる。「神漢連行事への誘いに参加しない、参加出来ない人たちはいる。今後も会報の役割は絶えず底辺まで考えて作って欲しい。」



働くホームページを目指して

五嶋美代子



神奈川県漢詩連盟のホームページが開設されたのは、平成二十四年(二〇一二年)四月のことだそうです。

それは、私が神奈川県漢詩連盟に入る六年前のことですが、会報第十四号の「ホームページ作成者のつぶやき 飯島敏雄」という記事を読んで確認しました。現在のホームページには、「会報」というページがあり、今までの会報をすべて閲覧することができそうです。私自身もそれを利用して得た知識です。

私が飯島敏雄師匠(師匠と勝手に呼ばせていただきます)からホームページの担当を引き継いだのは、令和三年(二〇二二年)の五月のことです。全くのド素人の私にホームページのイロハから飯島師匠は優しく教えてくださいました。飯島師匠は今年の躑躅が美しい頃、新たな旅路へ就かれましたが、前記した会報十四号の記事の最後で、「このHPを見てくださった方の中から漢詩を作ってみた、漢詩初心者講座を受講したい、また神奈川県漢詩連盟に入会したいという方が出てきてくださればこの上ない喜びです」と書かれていました。現在、そのようなことが現実となっているので、曲がりなりにも師



匠の志を継ぐことができているのかなと思っています。その際に大きな役割を果たしているのが「お問い合わせ」のページです。そこには、会員からの問い合わせはもちろん、入会や入門講座の申込だけでなく、予期せぬ遠方から、掲載された漢詩鑑賞の資料にまつわる問い合わせが来たり、公の機関から漢詩講演会等のイベント広告に関するコメントや、漢詩関連書籍の出版書店からのコンタクトなど、様々な方向からのメッセージが来ます。

また、現在のホームページは、薦清昭氏(十期)が手掛ける「神漢連カレンダー」「神漢連YouTube」「神辞会」「神漢連図書館」や牛山知彦氏(九期)が手掛ける「自詠自書の会」のページがより大きな輝きを放っています。複数人で分担することにより、より充実したホームページに発展する可能性が開かれるようになります。(左記はホームページ・トップ画面)

会員の皆様と社会一般に向けて、正確に早く、便利に使っていただけるよう、漢詩の面白さ、素晴らしさを多少なりともお伝えすることができるよう、これからも取り組んでいきます。

神漢連YouTubeチャンネル

薦清昭

令和三年五月にチャンネルが発足しました。コロナ禍の外出制限で、講座やサークル定例会などを参集しての開催ができなくなる中、ZOOMの接続手順をYouTubeにして会員の参考に、というのが動機の一つでした。やがて、推敲表など神辞会ツールの使用法や搜韵などのインターネット上の情報の解説など、コロナ前にすでに発足していた「利用が拡大しているパソコンとインターネットを漢詩創作にどう活かすか」を検討する活動をサポートする動画も配信するようになりました。

神漢連は会員が漢詩を楽しめる仕掛けが充実しています。YouTubeチャンネルも会員向けのプログラムが中心ですが、年二回開催される「漢詩講演会」の動画を、講演していただいた先生方のご了解を得て一般公開しています。最近では会員向けのYouTubeの一部を一般公開する例が増えてきました。神漢連の活動のPRとして会員勧誘の一助になることを期待していますが、パソコン、スマホ、インターネット世代の人々の中に漢詩愛好家が少しでも増えることも期待しています。



渉外

新井治仁・中村講二(顔写真)



神奈川県の新聞各社には毎年春の漢詩入門講座の告知記事掲載を依頼しているほか、春秋の漢詩講演会についてチラシ配布し、

また、神奈川県教育委員会と横浜市教育委員会には、前述の講演会と入門講座の後援名義使用の承認を取得し、各チラシにその旨を記載することで各イベント開催に御協力頂いている。各教育委員会へは開催毎に必要な書類を添付した事前申請が必要だが、申請受付混雑状況により承認までの日数が読めないことも多い。承認後のチラシ印刷終了と各イベント開催日の間に十分な期間がとれる様、開催施設申込のタイミングに合わせ、神漢連の企画担当との計画段階からの連携が必要である。メールによる申請だけでなく担当者との面談も含めたコミュニケーションが肝要で、逆にこちらの無理も聞いて頂けることもある。更に多くの参加者獲得のため、神奈川文化プログラムのマガカル・ネット・ドットコム及びヨコハマ・アートナビにインターネットによる開催予定の案内を掲載して裾野の拡大を狙っている。

チラシはみられてなんぼ

五嶋美代子

漢詩講演会や漢詩入門講座の広報手段として、毎回千五百部ほどのチラシを作成しています。図書館や公民館などの公共の施設へ配架をしたり、お知り合いへ紹介していただいたりなど、会員の皆様のご協力のもと、配っています。イベント当日のアンケート等で、「チラシを見て参加した」というコメントを見ると、多少なりともお役に立てたのかなとうれしくなります。いろいろな方のご意見を取り入れて、より神漢連らしいチラシ作りに取り組んでいきたいと思っています。



出版

神漢連は設立当初から会員の詩集編集と発刊に力を入れており、一方で各漢詩サークルや個人は自発的に漢詩集を発刊してきた。これらの出版・刊行は以下の四つに分類される。

①神漢連叢書：神漢連では、神漢連会員及び他県連会員に広く役立つ漢詩関係の図書の出版を目指している。「七言絶句ここから一步」を二〇一五年に一号として出版し、第五号を二〇二二年に出版したが、以降は途切れている。

②神漢連漢詩集：会員の漢詩集である神奈川清韻はその第一集を神漢連創立五年目に発刊し、以降数年毎に発刊している。設立二十周年の本年九月には第四集を発刊する。特筆すべきは、活動が大幅に制約されていたコロナ時に、コロナ禍克服を目指して神漢連内で紙上の漢詩大会を開き詩集としたことである。

③漢詩サークルの漢詩集：詩集を発刊したサークルは一部に限られているが、会員にとつて思い出深い内容になっている。

④神漢連会員の個人漢詩集
これらの図書・詩集は出来るだけ多くの神漢連会員に見ていただきたく、「神漢連図書館」に順次登録している。一覧は次頁に示す。

(香取和之記)

神漢連叢書

	図書名	出版日付	概要
1	七言絶句ここから一步 －佩文斎詠物詩選七絶抄	2015年1月	清康熙帝勅撰「佩文斎詠物詩選」から江戸漢詩人の館柳湾が選出した七言絶句660首の白文を、韻別に編集した。
2	歩こう神奈川、漢詩八十景	2016年9月	神奈川を14の地区に分け、「神奈川県郷土文学資料・漢詩文編」を中心に江戸時代の80首を選んで、解説した。
3	平成の漢詩遊び (岡崎満義著、西田書店)	2017年12月	神奈川新聞文化面に50回連載した「漢詩への誘い」の七言絶句50首をエッセイ風に纏めた。
4	だれでもわかる 七言絶句ここから一步(上)	2019年6月	「七言絶句ここから一步」の上平声340首の書き下し、語釈、通釈からなる注釈本である。
5	だれでもわかる 七言絶句ここから一步(下)	2021年10月	「七言絶句ここから一步」の下平声320首の書き下し、語釈、通釈からなる注釈本である。

神漢連漢詩集

	図書名	刊行日付	概要
1	神奈川清韻第一集	2011年4月	詩題自由。会員の七言絶句88首をA5判に、1頁2首掲載。
2	神奈川清韻第二集	2014年4月	詩題自由。会員の七言絶句103首をA5判に、1頁1首(含詩の背景)掲載。
3	令和2年度漢詩大会漢詩集 －コロナ禍克服を目指して	2020年7月	会員の応募75首を掲載。最優秀賞1首、優秀賞3首。佳作7首、入選10首。
4	神奈川清韻第三集	2022年1月	詩題自由。会員の140首(七言絶句、律詩1首)をA5判に、1頁1首(含詩の背景)掲載。各員は思い出に残る漢詩、記録に留めたい漢詩を投稿している。
5	神奈川清韻第四集	2026年9月	詩題自由。会員の144首(七言絶句、律詩3首)をA5判に、1頁1首(含詩の背景)掲載。投稿趣旨は第三集と同様。

漢詩サークル詩集

	漢詩サークル名	詩集名	刊行日付	補足
1	詩游会	詩游会漢詩集	2016年3月	会設立丸5年記念
2	九詩期会	江南漢詩の旅2017	2018年1月	住田・古田先生他計13名参加
3	五友会	五友会詩集第一集 田原健一先生追悼詩集	2018年6月	田原先生1周忌に刊行
4	詩游会	田原健一先生追悼詩集	2019年6月	中国名詩の田原先生画を掲載
5	好文会	好文会詩集(第二集)	2019年12月	会設立10周年記念
6	九詩期会	九詩期會詩集	2021年3月	会設立5周年記念
7	以文会	以文会詩集第二集 －櫻庭愼吾先生追悼集	2024年9月	桜庭先生1周忌に刊行
8	好文会	好文会詩集(第三集)	2025年12月	

個人詩集

	著者	詩集名	刊行日付	補足
1	古田光子	續水菰七絶集	2017年12月	
2	住田笛雄	簾軒主人漢詩集二	2020年8月	
3	鈴木栄次	頌山詩集－短歌・漢詩・俳句	2021年1月	
4	國田公義	周游漢詩抄－詩書・画・吟で楽しむ	2022年4月	
5	松井秀人	汲深録	2023年12月	
6	櫻庭愼吾	在洲櫻庭愼吾漢詩撰	2024年10月	
7	宇野次郎	菡萏集(私の漢詩五十首)	2025年9月	

中国・台湾漢詩ツアー

— 楽しかった思い出 —

中国江南ツアー

二〇一七年十月二十五日～三十日

中国江南ツアーは、九詩期会が中心となり、他のサークルも含めて総勢十三名の参加で実施した。本ツアーは漢詩のふるさとを訪ねるだけでなく、現地の漢詩愛好者との交流が大きな目的であった。

主な実施内容は次の通り。

- ・ 三日目、滄浪詩社蘇州詩詞協会との交流会では、双方代表者による詩吟朗詠と席上揮毫ありで和氣藹々の交歓会であった。



蘇州大学呉雨平教授の講演会では中国と日本の漢詩の発展の歴史的相違を説明され、有意義であった。

- ・ 観光では、上海の豫園、杭州の靈隱寺、西湖、水郷の烏鎮、寒山寺などを回った。

中国西安・敦煌ツアー

二〇一八年九月十九日～二十六日

中国西安・敦煌ツアーは、総勢十五名の参

加で実施した。

主な訪問地、実施内容は次の通り。

- ・ 初日は、西安城壁を見学、唐代長安の壮大さを実感させられた。

- ・ 二日目は、秦始皇帝兵馬俑博物館にて、始皇帝の陵墓を護る副葬品に圧倒された。



午後は碑林博物館で、石碑の数々を見学。更に興慶宮公園で阿倍仲麻呂記念碑を見学。

- ・ 三日目は、空海が修行した青龍寺を尋ね、空海記念碑、惠果空海記念堂、青龍寺に関わる壁題詩等を見学、その後陝西歴史博物館では唐代陵墓からの出土品を見学した。

午後は西安交通大学で交流会が実施された。交流会の第一部では日中双方から漢詩界の状況を説明し、理解し合った。続いて、吟誦交流、書道交流では、双方の代表選手による吟詠、揮毫を披露した。

- ・ 四日目は唐代の遺跡見学の日、高宗と則天武后の合同墓の乾陵は実際に歩いて、壮大さを実感した後、乾陵博物館では唐三彩などの出土品を見ることが出来た。

- ・ 五日目は、敦煌組の六名は敦煌到着後は、見渡す限り地平線の玉門関。陽関を訪ねた。陽関の前で「陽関三疊」を吟詠する人もいた。六日目は、「砂漠の大画廊」といわれる、莫

高窟を見学、精緻な美しさに驚かされた。その後、鳴沙山では駱駝に跨って砂丘の散策を楽しんだ。

- ・ 七日目は、北京空港経由で帰路についた。

台湾漢詩ツアー

二〇一九年九月八日～十一日

台湾漢詩ツアーは総勢十三名参加で実施し、主な訪問地、実施内容は次の通り。

- ・ 初日は一路台湾南部の高雄へ直行。六合夜市には、日本にない果物類が並んでいた。

- ・ 二日目は、蓮池潭地区の龍虎塔では、龍の口から虎の口へと楽しく潜り抜けた。

その後台南観光後、一路新幹線で台北。

- ・ 三日目は、十份でランチを楽しみ、九份で郷土料理を味わった。夜は日台漢詩人交流会が実施され、席上は揮毫と吟詠の交歓で盛り上った。

- ・ 四日目は、故宮博物院の見学、青銅器、陶磁器など中国六千年の精華が収められており、皆さん感嘆しきりであった。

忠烈祠の儀兵交代式を見学後、重慶南路では書店組と書道具店組に分かれて買い物を楽しんだ。その後、空港に直行、一路帰国の途についた。

(高津有二記)



令和六年度全日本漢詩大会 神奈川大会 —— 会員の力を結集して盛大に開催 ——



事務局長 久川憲四郎

この十年(二十年
全てを振り返って
みても)何と言っ
ても神漢連始まっ
て以来の最大行事は

「令和六年度全日本
漢詩大会神奈川大

会」開催であった。十月二十六日に「はまぎん
ホール ヴィアマール」での大会」と同夜の横浜
中華街「葉香新館」での交流懇親会、そして翌
日に「三溪園での吟行会」を盛況裏に終える
ことが出来た。これらは偏に神漢連の会員皆
様の尽力の賜物です。厚く御礼申し上げます。

大会は概ね好評であり、特に会場はほぼ満
席で、活気ある全日本漢詩大会であったとの
声が多く寄せられた。また、主催者にとって
嬉しかったのは、JR桜木町駅から会場への
道の所要所に会員が立っていて案内をする
など「おもてなしの心」で各県連の人々を温
かく受け入れていると言われたことでした。
表彰関係では、多数の神漢連の仲間が受賞し
たこと。内訳は、特別賞四名、秀作一名、入選
四名。おめでとうございます。

以下、それぞれの内容をみていくと、大会

の部は、「漢
詩再興へ新
たな息吹を」
のテーマで、

全日本漢詩

連盟と神奈川県漢詩連盟が共催して、十月
二十六日(土)十三時から、横浜みなとみら
い地区の「はまぎんホール ヴィアマール」
において開催、全国から漢詩愛好家、総勢
三百五十名の参加を得て、会場はほぼ満員状
態であった。

大会開会式は、神奈川県漢詩連盟(以下、神
漢連)水城まゆみ副会長の開会宣言、神漢連香
取和之会長の挨拶、神奈川新聞社須藤浩之社
長の来賓挨拶でスタートし、来賓の紹介、選者
の紹介、大会役員の紹介が行われた後、表彰式
に移行した。全応募作品は、一般が二百九十二
首、U(アンダー、以下同じ)23が五十二首、U
18が六首の合計三百五十首の中から、厳正な
審査の結果、次の作品に各賞が与えられた。

一般の部は、特別賞十三首、秀作六首、入
選十七首、U23奨励賞 最優秀賞一首、優秀
賞二首、秀作五首、入選七首、U18奨励賞
最優秀賞一首であった。表彰式では、特別賞
受賞作品吟詠が行われ、正面スクリーンに作
品が映じられる中、文部科学大臣賞の「金港
雑詠」、続いて「柳津送別」「立夏野渡」「海上
送別」「能登半島地震」「瀬浦」「浮浪」の七作品
が、栗城笙童氏の尺八伴奏で、神漢連会員七
名による吟詠で行われた。記念講演は、鷺野

正明全漢連会長が「蘇州の歴史と漢詩ー西施
のいた頃ー」と題して、春秋末期の呉越抗争、
中国四大美人の一人といわれる西施にまつ
わる話で会場を沸かせた。大会の最後には構
成吟「神奈川を詠うー漢詩と共に旅をしよう
ー」として、漢詩八首を岳精流日本吟院の皆
さんに吟じて頂き閉会となった。

夜の交流懇親会は、横浜中華街の広東名菜
「葉香新館」で八十五名の参加にて行われ、広
東料理を堪能するとともに、参加者相互の懇
談が始まり、最初は各テーブルで、次にテー
ブルを越えてあちらこちらで対話が行われ、
懇親・交流の実を上げた。懇親会場に入る前
に、横浜媽祖廟にある故石川忠久先生の四言
詩詩碑を見学した人もおり、その詩を岳精会
宗家である横山精真氏が即興で吟詠するなど
盛り上がり、参加者は時間を忘れるほど充実
し楽しい懇親会となった。

翌二十七日(日)は、横浜市中区本牧にあ
る国指定名勝の「三溪園」で吟行会が行われ、
四十七名が参加した。三溪園は横浜の実業
家・原三溪が造り上げた日本庭園で、広さは
五万三千坪。午後の部の講演会は、重要文化
財の「旧燈明寺本堂」を貸し切って、関東学院
大学教授の鄧捷先生による「原三溪の文人趣
味・『出世』志向と三溪園」(「出世」は俗塵を
出るの意)の講演を皆で約一時間拝聴した。
こうして、令和六年度全日本漢詩大会神奈
川大会は総ての行事を盛況のうちに無事終え
ることができた。偏に会員皆さんの力です。

特記事項

竹林舎友の皆様有難うございます！

香取和之

「竹林舎」は二〇一四年に設立されましたが、その趣旨は「詩力の高いベテラン会員の皆様に『竹林舎友』になって頂き、執行部隊への助言と後輩の指導等をお願いする」ことです。

当初のメンバーは、酒井謙太郎、玉井幸久、飯沼一之、城田六郎、古田光子、住田笛雄、桜庭慎吾(敬称略)です。ご逝去された方以外は、今も元気に活躍されており、現在のメンバーは、玉井幸久、飯沼一之、古田光子、住田笛雄、三村公二、水城まゆみ、中島龍一、高津有二(敬称略)です。

竹林舎友の方々には、漢詩サークルの指導者、漢詩鑑賞会の講師としてご活躍頂いています。玉井先生は百歳を越されてもお元気に好文会の御指導をされており、また鑑賞会A、C及び大簡会では毎回貴重なご指摘を頂いています。さらに、神奈川清韻第四集(二〇二六年九月発行)では編集長をお願いしています。中島先生には二〇二五年六月に新設した漢詩鑑賞入門講座(通称、鑑賞会D)の講師をして頂いており、併せて清韻第四集の副編集長もお願いしています。

このように、竹林舎友の方々のご尽力で、神漢連の活動の質が維持されているのです。

玉井先生百歳おめでとうございます！

白石信隆



燧翁 玉井幸久先生は、昨年満百歳を迎えられました。先立つて一昨年八月、三十一名が集い、白寿をお祝いする有志の会を盛大に催しました。

先生も大変ご機嫌で百歳に当たっての思いを、七絶一首と排律二首にして披露されました。近年、百歳は珍しくありませんが、身体の健康と頭脳の明晰さ、さらに行動力をも維持された方は稀有と言ってもよいと思います。「この十年の歩み」を振り返って、その事が、ひいては会員にとっても、計り知れぬ恩恵となった事を、特に記録しておきたいと思っています。

好文会では今も講師として指導され、鑑賞会A・鑑賞会C・大簡会などの各会では長年の唐詩その他の解説は無論、その後も正鵠を射たご発言によるご指導が今も続いています。

また、これらを可能にしたのがコロナ禍の折に素早くパソコンを入手し、習得されたことです。おかげで、この時期にも右に掲げた各会へのご出席とご指導が可能になり、今に至っています。このほか、ホームページでは隔月に絶句の解説を連載中です。又、一昨年の全日本漢詩大会神奈川大会で審査員の重責を務められた事も記憶に新しいところです。先生の百歳は通過点です。益々お元気で。

故人の思い出

石川忠久先生の思い出

前会長 三村公二

神奈川県漢詩連盟は故石川忠久先生には言葉では言い尽くせない多大の恩恵を受けてきた。二〇〇六年に連盟が創立された時からお亡くなりになられた二〇二二年まで、毎年総会にご出席いただき、ご講演をお願いしてきました。その間、吟行会、自詠自書展等にも参加していただき、数々のお褒めの言葉や励ましの言葉を頂いてきた。なかでも、入門講座とその後サークル交流会(バトル漢詩甲子園)を「金河新様式」と名付けられ、称賛していただいた事は忘れられない大きな思い出である。「新聞に広告を出して新人を募集し、これをクラスに編成して洒落た会名を付け、先輩が乗り込んで指導をする、それを積み上げ、バトルと称して互いに競わせる、というシステムをこしらえたのは特筆に値するものだ」。この言葉で当時の皆さんがどれほど力づけられた事か。

又、故城田六郎さんが佩文齋詠物詩選から七言絶句だけを選び出して「七言絶句ここから一步」を発刊した時には、「神漢連の知恵者が、佩文齋詠物詩選をコンパクトな形に仕立て直して、神漢連叢書の第一冊として安価に提供しようという快挙を私は満腔の賛意を以て迎える。多くの人に是非座右にそなえてもらいたい。それにしても表題が素晴らしい。」

と絶賛された。(因みにこの冊子の表題はネーミングの名人、当時の岡崎会長である。)

田原健一副会長・事務局長の思い出

前会長 三村公二

故中山初代会長と故田原初代事務局長の二人が、現在の神漢連の基礎を作られた功績は誰しもが知る所である。入門講座・サークル結成(含む霧笛女子会)、研修会、鑑賞会、会報、HP、吟行会、その他全ての行事がこの時代にスタートしている。中山会長は厳格な方で、初心の方にも厳しい指導をされたが、必ず陰で田原事務局長がフォローされていた。又、適材適所に人を配する人使いの名手でもあった。

平成二十一年、横浜が開港一五〇周年という事で開催した漢詩大会で。当時の岡崎会長がご都合悪く出席できなくなって、開会挨拶文を水城さんが代読する事になっていた時、同じく体調を崩され欠席予定だった田原副会長が病をおして急遽出てこられ、代読ではなくご自身の言葉で挨拶されたのもいかにも田原さんらしく懐かしい思い出である。

もう一つ忘れてはならないのは、没後、ご遺族から、故人のご遺志だといって、神漢連の更なる発展のために使つてほしいと百万円のご寄付を頂戴した事である。このお金は、そのお気持ちを尊重し、一般会計から独立させ、今も「田原基金」として叢書の出版などに活用させていただいている。

城田六郎先生の思い出

前事務局長 高津有二

平成二十一年(二〇〇九年)、好文会(第三期生)の発足以来、十三年間ご指導を頂いた大先生である。発足当時十二名の会員で現在も会員は五名となっているが、毎月の例会の後の懇親会は楽しい思い出となっている。

城田先生の最大のご功績は、神漢連叢書の第一号の「七言絶句ここから一步」の発行である。当時、大簡会で使用していた「佩文齋詠物詩選」の膨大な資料の中から古詩、律詩を除き、七言絶句六百六十首を韻別、詠物別に分類、全てを手書きでノートに纏められた。これが神漢連叢書として発刊され、会員をはじめ全国の各県連にも紹介され、「だれにもできる漢詩の作り方」とともに初心者、中級者の座右の書となっている。

令和二年、第三十五回国民文化祭・みやぎ2020「全国漢詩の祭典」で文部科学大臣賞を受賞された。その翌年、介護されていた奥様の後を追うように幽明境を異にされたのは、正に痛恨の極みである。

最後に拙詩を披露して御礼に替えたい。

弔城田六郎恩師 城田六郎恩師を弔う

才藻清高詩酒親 才藻清高詩酒に親しみ
数多錦繡絶儔倫 数多の錦繡儔倫を絶す
薫陶欲謝不能訪 薫陶謝せんと欲すも訪う能わず
白玉樓中得意人 白玉樓中意を得たる人

桜庭慎吾先生の思い出

香取和之

桜庭先生には公私共に大変お世話になり、思い出は尽きません。先生は神漢連の第二代事務局長(二〇一一年〜一四年)として神漢連の発展に努められ、その後も以文会を始めとする多くの漢詩サークルで後輩の指導に情熱を傾けられました。また漢詩鑑賞会Aでは二〇二〇年から「宋詩鑑賞会」の講義を始められ、二〇二三年九月に逝去されるまで続けられました。

漢詩を熱心にやられる方は多いですが、先生ほど真剣に取り組まれた方は稀です。先生にとって、漢詩は「人の生きざま」であり、「人間の本性に根差し、それを明らかにするもの」と捉えておられました。

従って指導も情熱的で、時には激高することもあり、非常に厳しいものがありました。その奥に優しさを常に秘めておられました。筆まめで常に多くの会員に励ましの葉書を書かれ、勇気づけられた方は多かったと思います。

先生の辞世の詩ともいべきものは、亡くなられた直後の學士會会報に掲載された「追稱蘇軾」です。「東坡開壘躬耕客、嶺海親交土着民、貶謫數遭無挫折、貫通獨立不羈人」。先生は晩年、蘇軾を特に敬愛されており、本詩はその蘇軾を詠ったものですが、先生ご自身のことだったと思えてなりません。

漢文法基礎講座開講

前事務局長 高津有二

会員の皆さんから大変強い要望のあった、漢文法基礎講座を横浜国立大学の高芝麻子先生を講師として実施した。会員の八十名を超える受講希望者があり、折柄のコロナ禍の為に二〇一〇年から二〇一一年にかけて二期に分け、各五回ずつの講座を実施した。

会員の皆さんは、遠い昔に習った漢文法を忘れてしまった人も多いけれど、漢詩の作詩上では守らねばならぬ絶対条件であるため、熱心に聴講、質問も多く出されて大変活発な講座となった。

中国から渡来した漢文は、古代日本人の叡知の結集により解読できるようになり、漢詩を日本語の詩と混同する人がいるが、紛れもない外国語の詩である。

講座では、漢詩の用例を中心に次のタイトルで、外国語の文法を分かり易く解説され、楽しい授業となった。

- 第一回 文の構造、否定の表現
 - 第二回 再読文字、疑問・反語の表現
 - 第三回 受け身、使役。「あり」の表現
 - 第四回 仮定、限定、感嘆、台詞
 - 第五回 対句、比較、数の表現
- 漢詩を楽しむ皆さんは、時折、漢文法に親しむ時間を持つても良いかなと思います。

神漢連創立十五周年記念行事

令和三年に創立十五周年を迎え、新時代にふさわしい「漢詩を学ぶ・漢詩で遊ぶ」の活動を求めて、前年からのコロナ禍で対面打合せや開催自体に各種制限が課される中、三種類の記念行事が実施されました。

一、記念式典と記念漢詩講演会

日時 令和三年十月十四日 一時半～四時半
場所 神奈川近代文学館ホール

①記念式典

- ・ 式辞 三村公二 神漢連会長(当時)
- ・ 祝辞 浅岡清明 東京都漢詩連盟会長
- 市川桃子 明海大学名誉教授
- ・ 挨拶 岡崎満義 元神漢連会長
- ・ 神漢連十五年の歩み
- ・ 記念行事の概要
- ・ 感謝状授与
- ・ 漢詩自由訳コンクール表彰式

②記念漢詩講演会(一般公開)

- ・ 講師 市川桃子 明海大学名誉教授
- ・ 演題 『三国志』の英雄 曹操の悲哀

二、十五周年を祝う各種記念行事

①オンライン吟行会(郵送応募を含む)

- 初めてのZOOMを利用した吟行会が開催され、全六十二句・五組の連句が完成
- ②中国人会員の仲間とのオンライン交流会
- 中国本土の複数の漢詩愛好家とオンラ

インで結び、「現代の「中国漢詩と日本漢詩」をテーマに討議

③記念グッズの制作頒布

- ・ エコバッグ：王之渙「登鸛鵲樓」
- ・ クリアファイル：蘇軾「春夜」

④漢詩の自由訳コンクール

課題詩部門(孟浩然「春曉」)と自由選択詩部門に、のべ四十六人が応募

⑤わたしの好きな漢詩アンケート

多彩な会員の特性を反映して人気は集中せず、多数・広範囲の詩が選出され、上位は「春望」「早發白帝城」「飲酒 其五」

⑥自詠自書展

十月二十日～二十四日、神奈川県民ホール第三ギャラリーで、七十余点を展示

⑦「神奈川清韻第三集」発刊

会員寄稿の百四十首を掲載

⑧「七言絶句ここから一步(下)注釈」発刊

三百五十四首の七言絶句解説を掲載

三、神漢連のネット対応力の強化推進

①十五周年記念ホームページの立上げ

開催行事の周知・参加募集に活用

②神漢連YouTubeチャンネルの開設

式典・記念講演会の様子をYouTubeで初めて後日公開し、欠席者も視聴可能に

③ZOOMの活用

コロナ禍を避けて、事前打合せやオンライン吟行会に利用して活用スキルを蓄積
(牛山知彦記)

詩のふくろ

—文部科学大臣賞を受賞して—

高橋純子



皆さんはどんなときに詩が降ってきますか。コーヒーを飲んでいるとき、お風呂に入っているとき、それともお散歩中でしょうか。

私は何度か、下3字、または上の4字が浮かんできたことはあるものの、決まった習慣はないと思っていました。

作詩に取り掛かる時は、辞書、詩語集、A4の紙、作詩に必要なものを一式そろえて机に向かい、うんうんと唸りながら作り上げていきます。簡単にできることはほとんどありません。ですから、句がひらめいて詩が降ってくる人をとてもうらやましく思うのです。

ところが先日、私にもある時にポロリンと句が降ってくるのがわかりました。私は今、以前読んだ漢詩の本を読み返しています。家では本を読む時間をあまりとることができないので移動時間が大切な読書の時間なのですが、電車の中であるページに殴り書きの文字を見つけました。そこには「双眸 碧海 両」と書いてありました。これは、昨年文部科学大臣賞をいただいた「吐魯蕃旅亭」

の結句の前身のようです。また、違う本には「牽児袖袂」「愛児 牽袂 問帰程」とミミズのはったような文字が……。平仄も全く気にしていないのでしようが、これも扶桑風韻作品「江上」の結句のもとになっています。これはどちらも、電車で思いついたもの。私の句が降ってくるところは、ゆられる電車の中だったのです。

しかし、この殴り書きの文字のことを全く覚えていなかったのです。見つけて初めて「あ、こんな前に一度思いついていたんだ……。」と驚く始末。これにはすっかり呆れてしまいました。これからは句が思いついたらすぐに詩の袋に入れないといけないと反省したのでした。

昨年末に、文部科学大臣賞を受賞された大先輩とお会いする機会がありました。その方の師も故石川忠久先生だったと分かり、講義の懐かしい思い出などを話していた時です。私が「漢詩を始めたころ、あまりにも私の詩がひどく、三年間程先生にはお直しをしていただけて……。」とお伝えしたところ、「僕はね、石川先生に『まずは教室に三年座っていないさ。座っているだけでいいから。そうしたら詩ができるようになるよ。』と言われたんだよ。」と。その方は一年後からは詩を提出されるようになったそうですが、そのお話をうかがって、あの三年間は無駄ではなかったのだと確信を持ちました。

随分ポジティブに思えるかもしれませんが、あの三年間、先生に「この詩は欲張り過ぎだなあ。」「こういう理屈は詩に詠まないこと。」「この句は言わずもがなだな。」などなど、沢山いただいた言葉が私の名もなき詩の袋に入っていることに気がついたからです。今でも出来上がった詩を読み返すと、石川忠久先生の声がしてくるのはこの袋のお陰。今では、そこに驚野正明先生の声も聞こえてきます。お二人の先生に沢山直していただいたポイントが宝物としてずいぶん貯まってきているはずです。

その袋には先生方の声だけではなく、今まで心を動かした風景や出来事、忘れたくない思い出などがごちゃごちゃに入っています。まずはこれを整理整頓しなくてはいいかもしれません。そしてこの袋を詩のアイディアやひらめいた句で満たしたい。詩を作ろうと机に向かう時、袋を取り出し、どれにしようかなと選んでいる自分の姿を考えるだけでワクワクしますが、そんな日はいつのことやら……。いや、あきらめてはいけません。漢詩とは長くお付き合いをしていくのですから、これからも詩の袋にコツコツと集めて、少しずつ増やしていきたいと思っています。

さてそれでは、今日も独り言をつぶやきながら辞書と詩語集と睨めっこ。まだ中身の少ない袋ですが、隅の方に何か詩の種が隠れていないか探してみることにいたします。

現代中国の漢詩事情

逸語会 松田奈月

中国で暮らして20年余りになるが、「詩詞」という言葉を目にする機会が増えたと感じる。杜甫や李白と



いった有名詩人のゆかりの地は観光地化され、西安では若者たちが唐代コスプレで闊歩し、まるで長安に紛れ込んだかのようだし、漢詩の世界を題材とした舞台やアニメも次々と新作が作られている。VRゴーグルをかけて仮想世界を体験する「詩詞盛会」というプログラムを体験してみたら、蘇軾や李清照などが次々と目の前に現れ、漢詩の世界へといざなわれたのには驚いた。



VRで歴代の詩人たちと交流できる「詩詞盛会」

ここまで「詩詞」が盛り上がりを見せている背景の一つには、80年代から中国で強化されている「愛国主義教育」があるだろう。「詩詞」は、愛国心や文化的アイデンティティを育む重要な教材として位置づけられている。中国の義務教育(小学校と中学校)で、暗記する詩

詞の目標は240首にも及ぶそうだが、求められているのは九九のような丸暗記ではない。いかにその世界観を理解し、表現を自分のものとして語れるかが重要であり、それが現代で尊敬される「文化人」として大切な素養なのだ。

そうした「詩詞力」を、国民的テレビ番組の「中国詩詞大会」では、老若男女がクイズや演説方式で毎回競っていて、2025年の第10回大会は視聴者人数が延べ2億5千万人を超えるほどの社会的ブームになっている。



中国の国営放送CCTVで放送「中国詩詞大会」
2016年から放送開始
第10回は物理学博士が優勝した



小学生向けの詩人衣装は学芸会などでの需要が高い

詩詞に親しむ素地が広く育まれている現代中国において、自ら漢詩を創作しようという機運は、必ずしも高まっているとはいえない。もちろん、漢詩情報サイトの「搜韻」では、漢詩作りのオンライン講座が開催され、受講者の詩の添削も熱心に行われているし、1987年に設立した「中華詩詞学会」は、「会員数5万人、中国全土で詩詞を創作している人口は推定350万人以上」と発表していて、中国で漢詩創作者が一定数いることは確かだ。だが、日本の俳句人口が千万人(これもあまり根拠がない数字ではあるが)と言われているのと比較すると、決してその規模が大きくないことがわかる。

歴史を紐解けば、中国の権力者の多くが詩詞を残してきたし、近代では毛沢東が漢詩を作っていたことはよく知られている。(中国の各地を旅していると、毛沢東の詩碑に出会うこともよくある)一方で、習近平国家主席が作ったという詩は見たことがないのだが、そのスピーチにおいて多くの詩を引用しており、『習近平 引用詩詞積読』(人民文学出版社)という本が出版されているほどだ。名句の引用は、民衆に身近な共感を生み出すとともに、文化の深い含蓄を示す尊敬される素養とみなされているのだろう。その活用方法はさておき、現代中国において、共通の共感できる文化の根底に「詩詞」が息づいているのは確かだ。そしてそれは、日本が歴史的に学んできた漢詩世界と通ずるところなのである。

資料編

神漢連会員の全国漢詩大会入賞・入選者一覧

■全日本漢詩大会／全国漢詩の祭典／扶桑風韻漢詩大会／多久市全国ふるさと漢詩コンテスト／漱石記念漢詩大会／諸橋轍次博士記念漢詩大会

開催年	大会	開催場所	神奈川県漢詩連盟会員特別賞・入賞・入選者名			
			特別賞	入賞(秀作)	入賞(佳作)	入選
平成28年 (2016)	全日本漢詩大会	京都	秋吉邦雄		大森冽子	大谷明史、水城まゆみ、高津有二、丹下和幸
	第十九回全国ふるさと漢詩	多久		川上修己		小嶋明紀子
	第一回漱石記念漢詩大会	熊本		小嶋明紀子	柴本信子	三上光敏、川上修己
	第八回諸橋轍次博士記念漢詩大会	新潟	(奨励)松井秀人、室橋幸子、(秀作)松本征儀、大森冽子、(特別)大谷明史			
平成29年 (2017)	神漢連創立十周年記念漢詩大会	横浜	室橋幸子、萬谷美子	葛清昭、嶋内隆行、中野三琴		大谷明史、松本祐輔、三上光敏、高津有二、中島義和、犬飼勇雄
	全日本漢詩大会	愛知	川上 修己		池上一利	岡田泰男、香取和之、齋藤護、城田六郎、杉森千枝美
	扶桑風韻漢詩大会		杉森千枝美		小嶋明紀子	尾崎明子
	第二十回全国ふるさと漢詩	多久		住田笛雄		城田六郎、杉森千枝美
	第二回漱石記念漢詩大会	熊本			上田尤子、牛山知彦、小嶋明紀子	住田笛雄、室橋幸子
	第九回諸橋轍次博士記念漢詩大会	新潟	(諸橋轍次賞)芝公男、(奨励)香取和之、上田尤子、(秀作)住田笛雄、柴本信子			
平成30年 (2018)	全日本漢詩大会	東京	俣野長生	生駒裕子		板本健作
	扶桑風韻漢詩大会			小嶋明紀子		杉森千枝美、水城まゆみ
	第二十一回全国ふるさと漢詩	多久		小嶋明紀子		
	第三回漱石記念漢詩大会	熊本		池上一利、小嶋明紀子		上田尤子、杉森千枝美、久川愛子、岩村順一
	第十回諸橋轍次博士記念漢詩大会	新潟	(最優秀)小嶋明紀子、(奨励)川上修己、村上良明、(秀作)三上光敏			
平成31年 令和元年 (2019)	全日本漢詩大会	香川	川上修己	香取和之		
	扶桑風韻漢詩大会				小嶋明紀子	大石加代子、仁上恵子、村田瑛子
	第二十二回全国ふるさと漢詩	多久	小嶋明紀子	池上一利		
	第四回漱石記念漢詩大会	熊本	小嶋明紀子	上田尤子	池上一利、高津有二、堀端保聖	室橋幸子、小林迪雄
	第十一回諸橋轍次博士記念漢詩大会	新潟	(最優秀)坂上貞夫、(優秀)岡田康男、牛山知彦、(秀作)大谷明史、小嶋明紀子、(奨励)岡崎勝郎、三上光郎、俣野長生、杉本千恵美			
令和2年 (2020)	全国漢詩の祭典(国民文化祭)	宮崎	(文部科学大臣賞)城田六郎、住田笛雄、岡田泰男	大石加代子		上田尤子、高津有二、高橋純子、横山真吾
	扶桑風韻漢詩大会		高橋純子	山口幸雄	大谷明史	岩村順一、五嶋美代子、杉森千枝美、水城まゆみ
	第二十三回全国ふるさと漢詩	多久		高橋純子		小嶋明紀子
	第五回漱石記念漢詩大会	熊本			横溝喜久男	小嶋明紀子・杉森千枝美
	第十二回諸橋轍次博士記念漢詩大会	新潟	(優秀)高橋純子、小嶋明紀子、杉森千枝美、(秀作)大谷明史、宇野次郎、小嶋明紀子			

令和3年 (2021)	全日本漢詩大会	石川	石川俊之	高橋純子		大石加代子、横溝喜久男
	扶桑風韻漢詩大会			高橋純子、 水城まゆみ	杉森千枝美	岩村順一、大谷明史、 小嶋明紀子
	第六回漱石記念漢詩大会	熊本				高橋純子、柴本信子
	第十三回諸橋轍次博士記念漢詩大会	新潟	(優秀) 大谷明史、(秀作) 大石佳代子、(佳作) 岡田泰男、高田宗治、宇野次郎、俣野長生、牛山知彦			
令和4年 (2022)	全日本漢詩大会	東京	高橋純子、五嶋美代子、 廣田雅人	大野若人		松本祐輔、水城まゆみ、 横溝喜久男
	第七回漱石記念漢詩大会	熊本			高橋純子、 小嶋明紀子	宇野次郎、牛山知彦、 松田奈月、横溝喜久男
	第十四回諸橋轍次博士記念漢詩大会	新潟	(最優秀) 高橋純子、(優秀) 小嶋明紀子、(秀作) 宇野次郎、小嶋明紀子、杉森千枝美、(佳作) 杉森千枝美、(日中友好の部・佳作) 牛山知彦、小嶋明紀子、杉森千枝美			
令和5年 (2023)	全国漢詩の祭典(国民文化祭)	石川	三村公二、高橋純子	廣田雅人		岡嶋宣昭、小嶋明紀子、 五嶋美代子、杉森千枝美、 三浦哲郎
	扶桑風韻漢詩大会		五嶋美代子	大谷明史	小嶋明紀子	内山早奈江、高橋純子、 松本祐輔
	第二十六回全国ふるさと漢詩	多久				中山洋子・小嶋明紀子
	第八回漱石記念漢詩大会	熊本	木村孝		五嶋美代子、 久川憲四郎、 小嶋明紀子	大谷明史、柴本信子、 (高壽奨励) 永野澄
	第十五回諸橋轍次博士記念漢詩大会	新潟	(最優秀) 五嶋美代子、(秀作) 大谷明史、(佳作) 小林迪雄、柴本信子、大野若人、木村孝、 (生誕記念の部)(優秀) 小嶋明紀子、(佳作) 杉森千枝美			
令和6年 (2024)	全日本漢詩大会・神奈川大会	横浜	白石信隆、小島数子、高橋純子、松本祐輔	岡嶋宣昭		青山正子、石川昌良、 田内隆、 福田忠夫
	扶桑風韻漢詩大会		高橋純子	大森 列子、 小嶋明紀子、 仁上恵子		水城まゆみ
	第九回漱石記念漢詩大会	熊本		五嶋美代子	杉本千枝美	柴本信子
	第十六回諸橋轍次博士記念漢詩大会	新潟	(諸橋轍次賞) 高橋純子、(優秀) 木村孝、宇野次郎、(佳作) 木村孝、牛山知彦			
令和7年 (2025)	全日本漢詩大会	徳島	(文部科学大臣賞) 高橋純子、杉森千枝美、木村孝			岡嶋宣昭、小嶋明紀子、 山口幸雄
	扶桑風韻漢詩大会		(石川岳堂賞) 高橋純子、 小嶋明紀子		久川憲四郎、 松本祐輔	宇野次郎、福田忠夫
	第二十八回全国ふるさと漢詩	多久		金澤武司郎		
	第十回漱石記念漢詩大会	熊本		横溝喜久男	岡嶋宣昭、 金澤武司郎、 木村孝、 平賀康雄	高橋純子、岡嶋宣昭、 金澤武司郎、仁上恵子
	第十七回諸橋轍次博士記念漢詩大会	新潟	(諸橋轍次賞) 岡嶋宣昭、(優秀) 岡嶋宣昭、(秀作) 小嶋明紀子、(佳作) 青山正子、鈴木潔州、小嶋明紀子			

注) 特別賞欄…特別賞(全日本漢詩大会、全国漢詩の祭典)、最優秀・優秀(扶桑風韻)、最優秀(全国ふるさと)、最優秀(漱石)
 入賞欄…秀作・佳作(全日本漢詩大会、全国漢詩の祭典)、秀作・佳作(扶桑風韻)、優秀(全国ふるさと)、優秀・佳作(漱石)
 全国ふるさと漢詩…正式名称は、「全国ふるさと漢詩コンテスト」。

「二」十年の歩み」資料編
特別賞受賞作一覽

◇二〇一六年度(平成二十八年年度)

平成二十八年年度 全日本漢詩大会京都大会

NHK京都放送局賞

秋吉邦雄

鶴陵廟偶成

鶴陵廟(鶴岡八幡宮)偶成

亭亭朱廟屹青天

亭々たる朱廟 青天に屹ち

鬱鬱綠雲纍紫烟

鬱々たる緑雲 紫烟を纍う

磴上偏憐小靈樹

磴上偏えに憐れむ 小靈樹

藥栽期得又千年

藥栽期し得たり 又た千年

◇二〇一七年度(平成二十九年度)

平成二十九年度 全日本漢詩大会愛知大会

大本山總持寺賞

川上修己

犬山城下鵜飼

犬山城下の鵜飼

瞻仰古城雲靜流

瞻仰す古城 雲靜かに流れ

蘇江汎汎遶陵丘

蘇江汎々として 陵丘を遶る

月潭篝火漁翁影

月潭の篝火 漁翁の影

澁刺香魚躍客舟

澁刺たる香魚 客舟に躍る

第九回諸橋轍次博士記念漢詩大会

最優秀賞・諸橋轍次賞

芝 公男

尺蠖

尺蠖

燕子頻來桑葉搖

燕子頻りに来りて 桑葉揺るる

見危尺蠖化蕭條

危うきを見て尺蠖 蕭條と化す

暫須無事顯姿體

暫く事なきを須ちて 姿体を顯し

欲進屈身為拱橋

進まんと欲し身を屈め拱橋を為す

平成二十九年年度 扶桑風韻漢詩大会

優秀賞

杉森千枝美

小笠原諸島聳島戰跡

小笠原諸島聳島戰跡

孤島潮回南海頭

孤島潮は回る 南海の頭

屯營壁壘變荒丘

屯營 壁壘 荒丘に變ず

二千里外故山遠

二千里外 故山遠く

征客北望登戍樓

征客北望 戍樓に登る

◇二〇一八年度(平成三十年年度)

平成三十年年度 全日本漢詩大会

全日本漢詩連盟設立十五周年記念大会

全国漢文教育学会会長賞

俣野長生

河畔偶成

河畔偶成

櫻花爛漫映江流

桜花爛漫 江流に映え

歲歲雙鳧此復游

歳々双鳧 此に復た遊びたり

翁媼相攜去年路

翁媼 相携えし 去年の路

低徊孤杖奈春愁

低徊する孤杖 春愁を奈せん

第十回諸橋轍次博士記念漢詩大会

最優秀賞新潟県知事賞

小嶋明紀子

蘭亭懷古

蘭亭懷古

溶溶曲水映韶光

溶々たる曲水 韶光に映ず

佳句染箋漂墨香

佳句 箋を染め 墨香を漂わす

晉代烏衣開宴處

晋代の烏衣 宴を開きし処

騷人今日共流觴

騷人 今日 共に流觴す

◇二〇一九年度(平成三十一年・令和元年度)

令和元年度 全日本漢詩大会香川大会

高松市長賞

川上修己

函嶺道中

函嶺道中

田城拂曉向雲峰

田城拂曉 雲峰に向かう

八里行程七尺筵

八里の行程 七尺の筵

磴道羊腸人馬喘

磴道羊腸 人馬喘ぎ

函山登盡夕陽春

函山登り尽せば夕陽春づく

第十一回諸橋轍次博士記念漢詩大会

最優秀賞新潟県教育委員会教育長賞

坂上貞夫

謝諸橋博士浩恩

諸橋博士の浩恩に謝す

實直謹嚴博士魂

実直謹嚴なるは博士の魂

人生在勤止軒言

人生勤むるに在り 止軒の言

漢和大典無窮業

漢和の大典は無窮の業

編纂功勞謝浩恩

編纂の功勞 浩恩に謝す

第四回漱石記念漢詩大会

最優秀賞

小嶋明紀子

西湖孤山觀梅

西湖孤山觀梅

湖邊幽歩柳毵毵

湖辺 幽歩すれば 柳毵毵たり

閑聽春鶯水似藍

閑かに春鶯を聴けば水藍に似たり

千載風流在何處

千載の風流 何処にか在る

梅開隱士一山庵

梅は開く 隱士の 一山庵

第二十二回全国ふるさと漢詩コンテスト

最優秀賞

小嶋明紀子

多久聖廟

多久聖廟

韶樂今猶奏廟堂

韶樂 今猶は廟堂に奏す

一山碧樹自清涼

一山の碧樹 自ら清涼たり

淳風千載因賢守

淳風 千載 賢守に因る

人謂恰如鄒魯鄉

人は謂ふ 恰かも鄒魯の郷の如しと

◆二〇二〇年度（令和二年度）

第三十五回国民文化祭・みやざき2020
全国漢詩の祭典

文部科学大臣賞

城田六郎

酒匂川畔村酒

酒匂川の畔の村酒

嶽麓發源清冽川

岳麓に源を發す清冽の川

麴塵粳稻僻村傳

麴塵粳稻僻村に伝う

綠醅初熟醞酬味

緑醅初めて熟し醞酬の味

一斗十千何惜錢

一斗十千何ぞ錢を惜しまんや

宮崎県教育委員会教育長賞

住田笛雄

賞國寶土器有感

国宝の土器を賞して感有り

繩文火焰至今遺

縄文の火焰今に至るも遺る

穰禱齋祈憶昔時

穰禱齋祈昔時を憶ふ

一萬年前民族技

一万年前の民族の技

寰球無類贊神奇

寰球に無類神奇を贊ふ

全日本漢詩連盟会長賞

岡田泰男

高千穂峽寫望

高千穂峽寫望

澗水安流湛幽壑

澗水安流して幽壑に湛え

石林相對挾蒼江

石林相對して蒼江を挾む

開關以來遮俗韻

開關以來俗韻を遮る

峽天鳥道峻無雙

峽天鳥道峻無双

令和二年度 扶桑風韻漢詩大会

優秀賞

高橋純子

海畔即事

海畔即事

松風謾謾送清涼

松風 謾々として 清涼を送り

碧海渺茫潮氣香

碧海 渺茫として 潮氣香し

鷗語數聲回首處

鷗語數聲 首を回らす処

漁舟一片入斜陽

漁舟一片 斜陽に入る

◆二〇二一年度（令和三年度）

令和三年度 全日本漢詩大会石川大会

全日本漢詩連盟会長賞

石川俊之

奈良公園

奈良公園

高天清朗古都秋

高天 清朗 古都の秋

霜葉飄風舞寺樓

霜葉 風に飄りて 寺樓に舞う

寂寞四邊林囿路

寂寞たる四辺 林囿の路

哀聲遠聽鹿呦呦

哀聲 遠く聴く 鹿呦々

◆二〇二二年度（令和四年度）

第十四回諸橋轍次博士記念漢詩大会

最優秀賞・三条市長賞

高橋純子

晚秋郊行

晚秋郊行

深秋小徑曉寒生

深秋の小徑 曉寒生ず

風拂幽叢香氣清

風は幽叢を払いて香氣清し

誰折一枝供古墓

誰か一枝を折りて古墓に供せる

傲霜白菊映苔明

霜に傲る白菊 苔に映じて明らかなり

令和四年度 全日本漢詩連盟設立二十周年
記念大会

二松学舎大学学長賞

高橋純子

江都雪景

江都雪景

月冷深更雪已收

月冷やかにして深更雪已に収まる

朔風吹袂水邊樓

朔風 袂を吹く 水辺の樓

皚皚九陌人蹤絕

皚々たる九陌 人蹤絶え

只見墨江分二州

只だ見る 墨江の二州に分かつを

日本詩吟学院賞

五嶋美代子

不懷都

都を懷はず

山如高閣聳嶙峋
鳥若街衢喧噪頻
京邑遙遙千里外
何愁漫叟不逢人

山は高閣の如く聳えて嶙峋
鳥は街衢の若く喧噪なると頻りなり
京邑 遙々 千里の外
何ぞ愁へん 漫叟 人に逢はざるを

斯文会理事長賞

廣田雅人

都城大雪

都城の大雪

亂飄雪後靜無風
紫陌高樓一白中
日出雲端光曄曄
都城忽變水晶宮

亂飄の雪後 靜として風無く
紫陌 高樓 一白の中
日 雲端を出れば 光 曄々
都城 忽ち變ず 水晶宮に

◆二〇二三年度（令和五年度）

第三十八回国民文化祭石川百万石文化祭
二〇二三全国漢詩の祭典

石川県教育委員会教育長賞

三村公二

廬山懷古

廬山懷古

突兀群峯春色回
香爐瀑布絕塵埃
昔時仙客逃名住
今日行人拾翠來

突兀たる群峯 春色回り
香爐の瀑布 塵埃を絶つ
昔時 仙客 名を逃れて住み
今日 行人 翠を拾いて來たる

全日本漢詩連盟会長賞

高橋純子

曉渡

曉渡

霜風瑟瑟荻蘆洲
野渡無人曉色幽
獨立鷗鷺不飛去
煙霞橫處護虛舟

霜風 瑟瑟たる 荻蘆の洲
野渡 人無く 曉色幽なり
独立 立つ 鷗鷺 飛び去らず
煙霞 横たわる 処 虚舟を護る

第十五回諸橋轍次記念漢詩大会

最優秀賞新潟県知事賞

五嶋美代子

秋日登樓

秋日樓に登る

暮雲搖拽碧湖頭
荻岸蒼蒼一片秋
坐想謝公千古詠
聊乘逸興試登樓

暮雲 搖拽す 碧湖の頭
荻岸 蒼蒼 一片の秋
坐して想ふ 謝公 千古の詠
聊か逸興に乗じて試みに樓に登る

第八回漱石漢詩記念大会

最優秀賞

木村 孝

獨遊熱海梅園

獨り熱海梅園に遊ぶ

溪水潺潺一曲琴
花晨清冷步梅林
溫湯暖氣亦如舊
折杪贈君紅玉簪

溪水 潺潺 一曲の琴
花晨 清冷 梅林を歩す
溫湯の暖氣 亦旧の如し
杪を折りて君に贈らむ紅玉の簪

令和五年度 扶桑風韻漢詩大会

優秀賞

五嶋美代子

秋宿山家

秋 山家に宿る

秋蟬向晚送寒聲
翠嶂參差四面橫
乍雨乍晴林變相
獨身止宿看雲行

秋蟬 晩に向いて 寒聲を送る
翠嶂 參差として 四面に横たわる
乍ち雨ふり乍ち晴れ 林相を變ず
独身 止宿して 雲の行くを見る

◆二〇二四年度（令和六年度）

令和六年度 全日本漢詩大会神奈川大会

神奈川県知事賞

白石信隆

柳津送別

柳津送別

同袍歸老向天涯
楊柳津頭共酒厄
鶴髮固知難再會
登舟解纜故遲遲

同袍歸老して 天涯に向かう
楊柳の津頭 酒厄を共にす
鶴髮 固より知る 再びは会い難きを
舟に登りて纜を解くこと 故に遲遲たり

神奈川県教育委員会教育長賞

小島数子

水川丸

水川丸

鷗鳥舞風金港天
碧波蕩漾岸堤邊
百般航海渾如夢
端麗孤高繫纜船

鷗鳥 風に舞う 金港の天
碧波 蕩漾する 岸堤の辺
百般の航海 渾て夢の如し
端麗 孤高たる 纜を繋ぐの船

横浜中華街發展会協同組合賞

高橋純子

灣上月明

灣上月明

風拂輕煙秋水閑
玉輪涵影小溪灣
三更依約桂香裏
一棹扁舟貫月還

風は輕煙を払いて 秋水閑なり
玉輪 影を涵す 小溪の灣
三更 依約たる 桂香の裏
一棹の扁舟 月を貫いて還る

神奈川新聞社賞

松本祐輔

横浜港雜詠

横浜港雜詠

漁家數點碧波頭
晒網汀沙繫釣舟

漁家數点 碧波の頭
網を汀沙に晒して釣舟を繋ぐ

今看繁華桑海變 今看の繁華 桑海の變
摩天大廈幾層樓 天を摩す大廈 幾層の樓

第十六回諸橋轍次博士記念漢詩大会

最優秀賞諸橋轍次賞

高橋純子

牡丹

牡丹

庭樹陰濃掩翠苔 庭樹 陰濃かにして 翠苔を掩ひ
春光欲盡牡丹開 春光 尽きんと欲して 牡丹開く
紅妝麗豔馨香遍 紅妝 麗艶 馨香遍し
宛似太眞含笑來 宛も似たり 太眞の笑ひを含みて來たるに

令和六年度 扶桑風韻漢詩大会

優秀賞

高橋純子

清明展墓

清明展墓

絲絲雨歇鳥聲妍 糸々たる雨歇み 鳥声 妍なり
爛漫山櫻發墓前 爛漫として山桜 墓前に発く
一縷香烟忽飄處 一縷の香烟忽ち飄る處
懷中孫子載花眠 懷中の孫子 花を載せて眠る

◆二〇二五年度（令和七年度）

令和七年度 全日本漢詩大会徳島大会

文部科学大臣賞

高橋純子

吐魯蕃旅亭

吐魯蕃旅亭

蓁蓁綠葉繞旗亭 蓁蓁たる綠葉 旗亭を繞り
映日葡萄滿架馨 日に映ず葡萄 架に満ちて馨し

繡帽胡童笑迎處 繡帽の胡童 笑ひて迎ふる處
明眸秋果兩深青 明眸 秋果 両つながら深青

徳島市教育委員会教育長賞

杉森千枝美

采摘枇杷

枇杷を采摘す

枇杷黃熟正離離 枇杷 黃熟して 正に離離たり
攀樹尤欣未覺衰 樹を攀ちて尤も欣ぶ未だ衰へを覺ざるを
不意筠籠傾瀉處 不意に 筠籠 傾瀉する處
金丸散落駭羣兒 金丸散落して群兒を駭かすとは

四国漢詩連盟会長賞

木村 孝

鄉校枳籬

鄉校の枳籬

春日枳花迎我開 春日 枳花 我を迎えて開く
清芬馥郁學堂隈 清芬 馥郁たり 學堂の隈
舊秋同摘黃金實 旧秋 同に摘みし 黄金の實
追憶籬邊胡蝶回 籬辺に追憶すれば 胡蝶回る

第十七回諸橋轍次博士記念漢詩大会

最優秀賞諸橋轍次賞

岡嶋宣昭

雪徑款冬

雪徑の款冬

侵寒遠訪野翁家 寒を侵して遠く訪ふ 野翁の家
曳杖村郊雪徑斜 杖を村郊に曳けば雪徑斜めなり
門巷鋪銀人不見 門巷銀を鋪きて人見えず
款冬纔發一株花 款冬纔かに発く 一株の花

令和七年度 扶桑風韻漢詩大会

最優秀賞石川岳堂賞

高橋純子

江上

江上

春陰漠漠暮江涯 春陰 漠漠たり 暮江の涯
楊柳依依拂水垂 楊柳 依依として水を払ひて垂る
幼女未知兵革動 幼女は未だ知らず 兵革の動くを
征衣牽袖問歸期 征衣袖を牽きて歸期を問ふ

優秀賞

小嶋明紀子

月夜

月夜

新婦擣衣江水流 新婦 衣を擣ちて 江水 秋なり
良人今夜守邊州 良人 今夜 辺州を守らん
誰堪一別已千里 誰か堪へん 一別 已に千里なるに
月照東西兩地愁 月の東西 兩地の愁ひを照らすに

注記

資料編特別賞受賞作品の選定基準

- ①全日本漢詩大会、及び全国漢詩の祭典…
- ②「扶桑風韻」漢詩大会…最優秀賞、優秀賞
- ③諸橋轍次博士記念漢詩大会…最優秀賞
- ④全国ふるさと漢詩コンテスト…最優秀賞
- ⑤漱石記念漢詩大会…最優秀賞

役員・運営委員他一覧

年度	◎会長、○副会長、●事務局長、▲事務次長	理事	執行理事	◎監事、○特別相談役、●相談役、▲顧問	運営委員
2017年 (H29)	◎三村公二、○水城まゆみ、中島龍一、●高津有二、▲香取 和之	玉井幸久、石川省吾、古田光子、岡田泰男、横山真吾、桜庭慎吾	吉岡昭夫、室橋幸子、川上修己、飯島敏雄、瀧川智志、喜多基	◎柴田洋、松井秀人、○岡崎満義、●住田笛雄、▲石川忠久、窪寺啓、浅岡清明、城田六郎、三上光敏、池上一利	中島義和、山口幸雄、中野雅利男、家吉幸二、犬飼堯、新井治仁、大森冽子、山岡健郎、岩波弘道、橋本孝一、牛山知彦
2018年 (H30)	—————	—————	(新) 新井治仁、大森冽子、山口幸雄	—————	(退) 新井治仁、大森冽子、山口幸雄、中島義和、中野雅利男、(新) 芝公男、細江利昭、篠崎吉之
2019年 (H31、R1)	—————	—————	室橋幸子、川上修己、飯島敏雄、瀧川智志、新井治仁、大森冽子、山口幸雄、牛山知彦	◎松井秀人、三上光敏、○岡崎満義、●住田笛雄、▲石川忠久、窪寺啓、浅岡清明、池上一利	家吉幸二、犬飼堯、岩波弘道、芝公男、細江利昭、篠崎吉之、鈴木正敏、安田茂
2020年 (R2)	—————	—————	—————	(退) ◎三上光敏、(新) ◎鈴木正敏	(退) 鈴木正敏、(新) 上田尤子、竹村文孝、飯田政治、内山義浩
2021年 (R3)	◎三村公二、○水城まゆみ、中島龍一、飯島敏雄、●高津有二、▲香取 和之	玉井幸久、古田光子、岡田泰男、横山真吾、桜庭慎吾、室橋幸子、川上修己	瀧川智志、新井治仁、山口幸雄、牛山 知彦、蔦清昭	◎松井秀人、鈴木正敏、○岡崎満義、●住田笛雄、▲石川忠久、窪寺啓、浅岡清明、池上一利	家吉幸二、犬飼堯、岩波弘道、細江利昭、安田茂、竹村文孝、内山義浩、柴本信子、高田宗治、五嶋美代子、東島正樹、橋本孝一、白石信隆
2022年 (R4)	—————	(退) 川上修己	(新) 久川憲四郎、柴本信子、白石信隆、五嶋美代子、高橋純子、東島正樹	—————	(退) 犬飼堯、安田茂、(新) 中村講二、安藤啓子
2023年 (R5)	◎香取和之、○水城まゆみ、新井治仁、●久川憲四郎、▲東島正樹	古田光子、岡田泰男、横山真吾、桜庭慎吾、室橋幸子、中島龍一、飯島敏雄、高津有二	瀧川智志、山口幸雄、蔦清昭、柴本信子、白石信隆、五嶋美代子、高橋純子、牛山知彦、高田宗治	◎松井秀人、鈴木正敏、○岡崎満義、三村公二、●住田笛雄、▲窪寺啓、浅岡清明、池上一利	家吉幸二、岩波弘道、竹村文孝、田川行雄、橋本孝一、中村講二、内山早奈江、田内隆
2024年 (R6)	—————	(退) 桜庭慎吾	—————	—————	(退) 竹村文孝、(新) 大森冽子、吉池純、木村孝、松田奈月、久保裕章、伊藤邦彦
2025年 (R7)	—————	古田光子、横山真吾、室橋幸子、中島龍一、飯島敏雄、高津有二、瀧川智志	山口幸雄、蔦清昭、白石信隆、五嶋美代子、高橋純子、牛山知彦、高田宗治、木村孝、吉池純、伊藤邦彦	◎松井秀人、中村講二、○岡崎満義、三村公二、●住田笛雄、▲窪寺啓、池上一利	家吉幸二、田川行雄、橋本孝一、内山早奈江、田内隆、大森冽子、松田奈月、佐野輝美、宮代まゆみ
2026年 (R8)	(退) ▲東島正樹 (新) ▲牛山知彦	(退) 古田光子	(退) 吉池純、伊藤邦彦	—————	(新) 北野ますみ、坂本慎治

注) 改選年2017, 2019, 2021, 2023, 2025年は、当該年の役員・運営委員他の氏名を記載。中間年は人事異動を記載。
 特別会員は2021年に制度が発足し、現在は市川桃子、高芝麻子、後藤淳一、鄧捷の諸先生である。
 現竹林舎友は、玉井幸久、飯沼一之、古田光子、住田笛雄、三村公二、水城まゆみ、中島龍一、高津有二の諸氏。

各年度末会員数

総会報告のデータに基づく

年度	入会数	退会数	在籍数	備考
2015年度（H27年度）	1	5	209	入会数、退会者数共に少ないが、理由不明
2016年度（H28年度）	92	12	289	大量入会者数は千代田岳精会漢詩受講生を新会員にカウントした為と思われる
2017年度（H29年度）	14	42	261	
2018年度（H30年度）	20	27	254	
2019年度（R1年度）	29	46	237	会費滞納退会者29名
2020年度（R2年度）	18	27	228	
2021年度（R3年度）	23	29	222	
2022年度（R4年度）	16	15	223	
2023年度（R5年度）	17	20	220	
2024年度（R6年度）	27	23	224	
2025年度（R7年度）	28	16	236	会費滞納退会者5名

表② 平成28(2016) 年度決算

一般会計決算				10周年事業基金決算			
収入	前年度より繰越	508,977		収入	經常会計基金	500,000	
	年度会費	508,000			協賛金	577,000	
	行事参加費	337,000			その他（懇親会費、記念誌頒布代等）	1,811,860	
	その他収入	272,330			合計	2,888,860	
	合計	1,626,307					
支出	經常支出	247,047		支出	記念式典	579,061	
	行事費	271,072			記念式典	147,540	
	經常外支出	696,086			記念誌（会報他）	1,431,379	
	合計	1,204,204			漢詩大会・フェスティバル	461,860	
差引	翌年度へ繰越	422,103		差引	トートバッグ	455,105	
	先納分を除く実質繰越	(382,103)			合計	3,074,945	
						△186,085	
					一般会計より	186,085	
					補填後残高	0	

表① 令和7(2025) 年度決算

一般会計決算				田原会計決算			
収入	前年度より繰越	627,328		収入	前年度より繰越	946,257	
	年会費	716,500			神漢連叢書頒布等	0	
	行事参加費	418,000			その他	0	
	その他	73,980			合計	946,257	
	合計	1,835,808					
支出	庶務費	533,150		支出	神漢連叢書刊行	0	
	広報事業費	211,518			その他	0	
	教育事業費	366,257					
	全漢連費	231,350					
	その他	8,080					
	合計	1,350,355			合計	0	
	翌年度へ繰越	485,453					
差引				差引	翌年度へ繰越	946,257	

神漢連会計のこの十年

前年度の決算は表①のとおりであり、十年前の決算は表②のとおりである。

会計担当 山口幸雄

表③ 令和3(2021) 年度決算

15周年記念事業決算			
収入	一般会計から	0	
	協賛金	817,500	
	懇親会参加費	0	
	記念品等頒布費	430,300	
	合計	1,247,800	
支出	案内・記念式典	158,740	
	会報29号	56,080	
	漢詩フェスティバル	111,306	
	神奈川清韻刊行	190,062	
	記念グッズ製作	529,599	
差引	合計	1,045,787	
		202,013	
	翌年度一般会計へ	202,013	



謝の意を表します。

催しており、その決算内容は表②、表③のとおりである。いずれも多くの方々の協賛金によって支えられている。感謝の意を表します。

一般会計については大きな変わりはなく、基本は会費収入によって通常の事業や庶務経費等を賄い、入門講座や吟行会・研修会などの事業については参加者からの収入をもって経費に充てることで事業を遂行している。

この十年間で最も大きなできごとは、平成二十九年故田原健一副会長のご遺族からお贈りいただいた寄付金により「田原基金」が設置されたことである。以後一般会計から独立した「田原会計」として神漢連叢書の刊行に充てられており、「だれでもわかる七言絶句ここから一歩上・下」はこの基金により刊行された。近年はこの基金の執行が休止しているが、今後さらに活用されることが望まれる。

また平成二十八年度及び令和三年度にはそれぞれ創立十周年、十五周年記念事業として、記念式典や漢詩フェスティバル等の行事を開

神奈川県漢詩連盟規約

(名称)

第一条 本会は、神奈川県漢詩連盟と称する。

(目的)

第二条 本会は、神奈川県における漢詩の研究、普及ならびに交流を目的とする。

(活動)

第三条 本会は全日本漢詩連盟(以下、全漢連という)の下部組織として、その目的達成のための活動を行う。
2. 本会は、神奈川県下の全漢連傘下の友好漢詩団体と連携、協力して、漢詩の普及や啓蒙活動に取り組む。

(会員及び会費)

第四条 本会は、本会の目的に賛同する者をもって会員とする。

2. 会員は一般会員、賛助会員及び法人会員の3種類とし、各々入会手続きをとり第4項の会費を納めた個人及び法人を会員とする。

3. 一般会員、賛助会員について全漢連との関係は次の通りとする。

*全漢連個人賛助正会員(個人として全漢連に入会)

*全漢連個人一般正会員(個人として全漢連に入会)

*全漢連個人一般正会員(本会経由で全漢連に入会)

*全漢連一般団体正会員(一般漢詩団体経由で全漢連に入会)

*全漢連個人地区会員(本会のみで全漢連に入会人数のみ登録)

4. 会費は、一般会員は年2000円、賛助会員は一口年10000円、法人会員は一口年50000円とする。

①10月1日以降に入会した一般会員の会費は、当該年度の1/2、年1000円とする。

②上記とは別に本会経由の全漢連会員からは、下記の新漢連年会費を徴収し、本会から全漢連に一括納入する。

全漢連個人一般正会員は2500円/年とする。これに伴って、全漢連からの資料は本会経由で上記会員に配布する。

③85歳以上の一般会員又は賛助会員は、5年間分の一

般会費又は賛助会費を一括納入すれば、終身一般会員又は終身賛助会員として扱われる。

5. 入退会手続き

①入会は所定の申込書によって必要事項を記載して事務局に申し込む。

②退会は口頭または書面(書式自由)で事務局に申し出る。

③年会費が2年間以上未納の場合は自然退会とする。

④本会の運営を著しく妨害する行為があった会員には、理事会で協議して、適宜にしかるべき対応を決めることが出来る。

(特別会員及びU23会員)

第五条 前条の規定で定める会員のほか、特別会員及びU23会員を設ける。

2. 特別会員は、漢詩・中国文学の学識経験者で、本会の運営及び会員の教育を支援する意思を有する者とする。

3. 特別会員の選任は、会長が依頼し、理事会での承認を経て、総会で承認する。

4. 特別会員の会費は無料とし、本規約に定める会員(第四条の規定により定める者)についての規定は適用しない。

5. U23会員は、23歳以下で、本会の目的に賛同する者とする。

6. U23会員の会費は無料とし、本規約に定める会員(第四条の規定により定める者)についての規定は適用しない。

(事業)

第六条 本会は、その目的を達成する為、次の事業を行う。事業内容については細則に定めることが出来る。

(1) 教育関連事業

漢詩入門講座、漢詩サークル指導、研修会、漢詩鑑賞会等

(2) 出版関連事業

神奈川清韻、神漢連叢書

(3) 広報関連事業

会報「漢詩神奈川」、ホームページ

(4) 趣味関連事業

自詠自書

(5) その他本会にふさわしい事業

吟行会、サークル交流会、神辞会等

2. 趣味関連事業において新しい事業を開始する場合は運営委員会の承認を得るものとする。

(役員)

第七条 本会を運営するため、次の役員を置く。

会長

1名

副会長

若干名

理事(執行理事を含む)

若干名

事務局次長

1名

事務局次長

必要に応じて若干名

2名以内

監事

2名以内

2. その他必要に応じて会長の委嘱により顧問、特別相談役、相談役及び名誉会長を置くことが出来る。

(役員の選任)

第八条 役員の選任は次の通りとするが、理事会での承認を経て、総会で承認することを原則とする。

(1) 会長は、理事会で理事の互選とする。

(2) 理事は、会長が推薦し、理事会の承認を経て、総会で承認する。

(3) 副会長は、理事の中から会長が指名する。

(4) 執行理事は、会長が理事の中から指名する。

(5) 事務局次長及び事務局次長は、会長が執行理事の中から指名する。

(6) 監事は、会長が会員の中から指名する。但し理事またはその他の役員と兼務することは出来ない。

(役員の任務)

第九条 役員の任務は、次の通りとする。

(1) 会長は本会を代表し、会務を統括する。

(2) 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときは、会長の職務を代行する。副会長が複数の場合は、予め理事会において定めた順位に従って会長代行の任に就く。

(3) 理事は、理事会を構成し、総会に諮る予算、決算および本会の運営に係わる重要案件を審議し、その決定事項を総会に提案する。

(4) 執行理事は、正副会長と共に会務を運営執行する。

(5) 事務局次長は、会長の指示を受け、本会の事務を統

括、推進する。

(6) 事務局長のもとに次の実行グループを置き分担して本会の運営を行う。

①総務グループ、②教育グループ、③事業グループ

④広報グループ、⑤経理グループ

(7) 事務局次長は、事務局長を補佐する。

(8) 監事は、会務及び会計の監査を行う。

(役員の任期)

第一〇条 役員の任期は2年間とし、再任を妨げない。また、欠員補充として選任された役員の任期は、前任者の残余期間とする。

(運営委員)

第二一条 運営委員の選任及び任務は次の通りとする。

(1) 運営委員は、漢詩サークルの代表者及び本会運営のために必要な知識、技能を有している者の中から会長が推薦し、理事会の承認を経て、総会で承認する。

(2) 運営委員は、会長、副会長、執行理事と共に運営委員会を構成し、会務の運営、執行に当る。

(3) 運営委員の任期は2年間とし、再選を妨げない。

(諸会議)

第二二条 総会は、本会の最高意思決定機関として、会長が年1回招集し、役員の選任、規約改定(但し、細則は除く)、事業計画、予算、決算の承認を行う。

2. 理事会は、必要に応じて会長が招集し、総会に提案する議案を審議する。理事会の構成員は役員とし、監事は議決に加わらない。

3. 運営委員会

①運営委員会は、定例として月1回開催し、総会で承認された事業計画を具体化し、実行計画を策定する。

②総会で承認された事業に関連の深い事業の実施、或は現状に即した内容の変更は、特に理事会に諮らなくとも運営委員会の決議に従って執行出来るものとする。

③第六条の事業の運営に必要な細則の制定、改定は運営委員会の決定により行うことが出来るものとする。

④但し、次のような重要案件は必ず理事会の承認を必要とする。10万円以上／一件の新規事業、その他本会

運営の根幹に係わる事項

4. 総会、理事会及び運営委員会の議長は、会長が務める。

5. 各会議で議決が必要な場合は、各々出席者の過半数の賛成により決する。

(漢詩サークル)

第二三条 漢詩に興味を持ち、漢詩の勉強を希望する者を対象にした漢詩入門講座を実施する。

2. 入門講座終了後に漢詩鑑賞または詩作を継続的に勉強するため有志が集まって漢詩サークル(以下サークルという)を結成することが出来る。

3. サークル活動推進の助言、指導のため神漢連として講師を派遣する。

4. サークルには神漢連会員以外の者は参加出来ない。

5. サークルの活動は独自に、自由に活動することが出来る。但し、対外的な活動を行う場合は、事前に総務グループに報告して了解を得るものとする。また、年度末には活動報告書と会員名簿を総務グループに提出するものとする。

6. サークルの代表者は、サークルの活動の取り纏めの任に当たるとともに、運営委員として本会運営の実務を担当する。

7. サークル員及びサークル間の相互交流と親睦を図るため、サークル交流会を実施する。

(竹林舎)

第二四条 漢詩に関する造詣が深いシニア会員が、会員の詩力向上及び本会の諸活動をサポートするため「竹林舎」を設置する。構成員を「竹林舎友」と称する。

2. 入会資格は次の通りとする。

①漢詩に関する造詣が深く、かつ詩力が高いシニア会員

②本会の諸活動に対して日常的なサポートが可能な会員

③会長が推薦して理事会が承認した会員

(会計)

第二五条 本会の事業年度は、4月1日から翌年3月31日までとする。

2. 本会の事業計画及び収支予算書については、毎事

業年度の開始日の前日までに会長が作成し、その後理事会及び総会にて承認を受けなければならない。

3. 本会の事業報告及び決算については、毎事業年度終了後、事業報告、及び収支決算書を作り、監事の監査を受けた上で、理事会及び総会の承認を受けなければならない。

4. 本会の運営費用に充てるため、寄付金の申出がある場合は、これを受ける。

5. 本会の運営上、行事費用が必要な場合には、その都度これを徴収する。

(所在地)

第二六条 本会の所在地は、事務局長の自宅とし、同地に事務局を置く。

(その他)

第二七条 この規約に定めない事項については、理事会において協議して定める。

付則

1. この規約は、平成18年10月14日から施行する。

2. 第六条の定めにかかわらず、設立第一期の会長は、発足人会で選出する。

3. 規約改定 平成24年5月22日(運営委員の設置、他)

4. 規約改定 平成27年5月20日(理事会・執行理事会の役割明確化、竹林舎の設置に関する補則新設)

5. 規約改定 平成29年6月21日(全漢連及び傘下友好団体との関係を明記、執行理事会の廃止、運営委員会の新設と役割の明確化、漢詩サークルの位置づけを明記、竹林舎の規約本文化、その他)

6. 規約改定 平成30年5月30日(10月1日以降に入会した一般会員の会費を改定)

7. 規約改定 令和元年5月29日(自然退会の会費未納期間を3年から2年に改訂)

8. 規約改定 令和3年10月14日(準会員制度の廃止、特別会員の設置)

9. 規約改定 令和7年5月29日(終身一般会員の新設、U23会員の設置、理事会の構成員と議決権、会計の追記、所在地の追記、用語の不統一の訂正)

神奈川県漢詩連盟会員一覽

発足時(平成十八年十月十四日)

七十八名

現在(令和八年六月末現在)

二百五十名

神奈川県漢詩連盟会員一覧

発足時(平成十八年十月十四日)

七十八名

現在(令和八年六月末現在)

二百五十名

相原 一輝	桜庭 慎吾	松田 滋	青木 修司	伊藤 邦彦	奥田 英道	小菅 幸枝	鈴木 潔州	辻 寛子	長谷川 昇	三浦 哲郎	水城まゆみ	三井美恵子	三塚 昌子	三村 公二	宮代まゆみ	向井 恒泰	村田 忠和	室橋 幸子	森園 尚美	森谷 正彦	諸星 暢義	谷嶋美知子	山口 隆久	山口 智子	山口 幸雄	山下 俊勝	山下 政嗣	山本 泰生	横溝喜久男	横溝比呂美	横山 真吾	吉池 純	吉田 登	和田 肇允	渡邊美貴子	渡辺 麗子																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
浅岡 清明	佐々木正人	松山 正明	青木 美憲	伊藤 光子	小野寺 薫	後藤 淳一	鈴木 重成	薦 清昭	服部 治	服部 直紀	三城まゆみ	三井美恵子	三塚 昌子	三村 公二	宮代まゆみ	向井 恒泰	村田 忠和	室橋 幸子	森園 尚美	森谷 正彦	諸星 暢義	谷嶋美知子	山口 隆久	山口 智子	山口 幸雄	山下 俊勝	山下 政嗣	山本 泰生	横溝喜久男	横溝比呂美	横山 真吾	吉池 純	吉田 登	和田 肇允	渡邊美貴子	渡辺 麗子																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
飯沼 一之	佐藤 敏彦	三崎 肇	青山 正子	犬飼 勇雄	影山亥史郎	後藤 俊男	鈴木 拓子	土屋 昇三	服部 直紀	三井美恵子	三塚 昌子	三村 公二	宮代まゆみ	向井 恒泰	村田 忠和	室橋 幸子	森園 尚美	森谷 正彦	諸星 暢義	谷嶋美知子	山口 隆久	山口 智子	山口 幸雄	山下 俊勝	山下 政嗣	山本 泰生	横溝喜久男	横溝比呂美	横山 真吾	吉池 純	吉田 登	和田 肇允	渡邊美貴子	渡辺 麗子																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																											
石井 彦徳	城田 六郎	水城まゆみ	浅岡 清明	今藤 洋海	風巻ひさ美	小林 豊朗	鈴木 宏久	土谷 益美	濱岡日出夫	濱口 秋子	三城まゆみ	三井美恵子	三塚 昌子	三村 公二	宮代まゆみ	向井 恒泰	村田 忠和	室橋 幸子	森園 尚美	森谷 正彦	諸星 暢義	谷嶋美知子	山口 隆久	山口 智子	山口 幸雄	山下 俊勝	山下 政嗣	山本 泰生	横溝喜久男	横溝比呂美	横山 真吾	吉池 純	吉田 登	和田 肇允	渡邊美貴子	渡辺 麗子																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
石川 省吾	住田 笛雄	三谷富美子	浅田 洸一	今村 絹子	嘉嶋 宏子	小林 迪雄	鈴木 富士子	程 梅	濱田 勝	濱口 秋子	三城まゆみ	三井美恵子	三塚 昌子	三村 公二	宮代まゆみ	向井 恒泰	村田 忠和	室橋 幸子	森園 尚美	森谷 正彦	諸星 暢義	谷嶋美知子	山口 隆久	山口 智子	山口 幸雄	山下 俊勝	山下 政嗣	山本 泰生	横溝喜久男	横溝比呂美	横山 真吾	吉池 純	吉田 登	和田 肇允	渡邊美貴子	渡辺 麗子																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
石川 忠久	仙場 幸男	三谷 昌子	安喰真理子	妹脊真理子	梶原 礼子	小林 由紀	鈴木 正敏	鄧 捷	浜田 勝	濱口 秋子	三城まゆみ	三井美恵子	三塚 昌子	三村 公二	宮代まゆみ	向井 恒泰	村田 忠和	室橋 幸子	森園 尚美	森谷 正彦	諸星 暢義	谷嶋美知子	山口 隆久	山口 智子	山口 幸雄	山下 俊勝	山下 政嗣	山本 泰生	横溝喜久男	横溝比呂美	横山 真吾	吉池 純	吉田 登	和田 肇允	渡邊美貴子	渡辺 麗子																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
石川 豊	高瀬美佐子	三橋 保三	新井 直行	岩崎美佐子	門松 牧子	小森 香織	住田 笛雄	遠山 和年	浜辺 又八	浜田 勝	濱口 秋子	三城まゆみ	三井美恵子	三塚 昌子	三村 公二	宮代まゆみ	向井 恒泰	村田 忠和	室橋 幸子	森園 尚美	森谷 正彦	諸星 暢義	谷嶋美知子	山口 隆久	山口 智子	山口 幸雄	山下 俊勝	山下 政嗣	山本 泰生	横溝喜久男	横溝比呂美	横山 真吾	吉池 純	吉田 登	和田 肇允	渡邊美貴子	渡辺 麗子																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																								
磯野 衛孝	田原 健一	宮路 栄輔	新井 治仁	岩波 弘道	香取 和之	最所 郁恵	瀬崎 麻子	登丸 昌子	原田 睦夫	浜辺 又八	浜田 勝	濱口 秋子	三城まゆみ	三井美恵子	三塚 昌子	三村 公二	宮代まゆみ	向井 恒泰	村田 忠和	室橋 幸子	森園 尚美	森谷 正彦	諸星 暢義	谷嶋美知子	山口 隆久	山口 智子	山口 幸雄	山下 俊勝	山下 政嗣	山本 泰生	横溝喜久男	横溝比呂美	横山 真吾	吉池 純	吉田 登	和田 肇允	渡邊美貴子	渡辺 麗子																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																							
市川 泰	玉井 幸久	室橋 幸子	荒木美知子	岩村 順一	金澤 武司郎	坂上 貞夫	田内 隆	長岡 真二	東 直子	東 睦夫	浜辺 又八	浜田 勝	濱口 秋子	三城まゆみ	三井美恵子	三塚 昌子	三村 公二	宮代まゆみ	向井 恒泰	村田 忠和	室橋 幸子	森園 尚美	森谷 正彦	諸星 暢義	谷嶋美知子	山口 隆久	山口 智子	山口 幸雄	山下 俊勝	山下 政嗣	山本 泰生	横溝喜久男	横溝比呂美	横山 真吾	吉池 純	吉田 登	和田 肇允	渡邊美貴子	渡辺 麗子																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																						
岩崎 徳康	塚本 周吉	本宮 陽子	安藤 啓子	上田 尤子	鎌田美代子	佐々木佐紀子	高田 麻子	長岡 巨知	東 睦夫	浜辺 又八	浜田 勝	濱口 秋子	三城まゆみ	三井美恵子	三塚 昌子	三村 公二	宮代まゆみ	向井 恒泰	村田 忠和	室橋 幸子	森園 尚美	森谷 正彦	諸星 暢義	谷嶋美知子	山口 隆久	山口 智子	山口 幸雄	山下 俊勝	山下 政嗣	山本 泰生	横溝喜久男	横溝比呂美	横山 真吾	吉池 純	吉田 登	和田 肇允	渡邊美貴子	渡辺 麗子																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																							
内村 才五	豊田小夜子	森 重光	安藤 弘	上田 幸文	川上 修己	指方順一郎	高津 有二	中島 龍一	平賀 康雄	久川憲四郎	東 睦夫	浜辺 又八	浜田 勝	濱口 秋子	三城まゆみ	三井美恵子	三塚 昌子	三村 公二	宮代まゆみ	向井 恒泰	村田 忠和	室橋 幸子	森園 尚美	森谷 正彦	諸星 暢義	谷嶋美知子	山口 隆久	山口 智子	山口 幸雄	山下 俊勝	山下 政嗣	山本 泰生	横溝喜久男	横溝比呂美	横山 真吾	吉池 純	吉田 登	和田 肇允	渡邊美貴子	渡辺 麗子																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																					
宇都宮義人	圓谷 照男	山内 大五	飯沼 一之	上野 芳博	川喜田 康	佐竹 信一	高橋 智	永野 澄	廣田 雅人	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫	福田 忠夫

神奈川県漢詩連盟 創立二十周年記念行事概要

ぜひ参加下さい

十月十四日に、神漢連は創立二十周年を迎える。

約一年前から記念行事企画委員会を立ち上げて、記念祝賀に相応しく、かつ、次の十年に繋がっていく企画を検討・実行してきた。

「会員間の親睦活性化」「サークルを越えた交流の促進」「漢詩文化の魅力を広く社会へ発信」の三つをその目的に掲げ、神漢連の発展が今後も継続することを目指します。

記念行事の概要

「記念式典」

・十月十三日(火)午後一時～、横浜市開港記念会館講堂で開催

・来賓 全日本漢詩連盟会長 鷲野正明先生
・神漢連二十年の歩みの解説
・功労者表彰

・役員、運営委員の紹介
・文部科学大臣賞受賞三作品の吟詠
・令和七年度文部科学大臣賞受賞者(高橋純子)の講話

「記念講演会」

・記念式典に引き続き、午後三時～、同会場で開催

・講師 全日本漢詩連盟会長 鷲野正明先生
・演題 美しい日本の風景・日本漢詩への誘い

「祝賀会」

・記念式典・記念講演会終了後、午後五時～ブリーズベイホテルで開催

「自詠漢詩作品展」

・記念式典前日から、横浜市開港記念会館一階会議室にて一般公開で開催

・自詠漢詩を題材とした書・画・写真等の自作作品展

「活動紹介コーナー設置」

・自詠漢詩作品展会場の一角に、同展開催中設置して、神漢連の各漢詩鑑賞会・神辞会・オンライン吟行会・叢書発行・その他諸活動を紹介

・揭示物・資料配置に加えて、担当係員による会員・連盟外向け口頭説明・宣伝を実施

「記念グッズ制作・頒布」

・記念式典会場・自詠漢詩作品展会場で、頒布(1枚五百円)

・神漢連オリジナル手拭い(司馬光・初夏)

「記念吟行会」

・十一月十七日(火)、金沢八景でのリアル吟行会を

復活開催(高芝麻子先生ご指導)

「旅行企画」

・十月三十日～十一月一日、全国漢詩の祭典高知大会・吟行会への参加を含む旅行企画を実施

「神奈川清韻第四集」

・百四十四首の会員投稿詩を掲載した詩集を編集・発行して会員全員に無料配布

「神漢連二十年史―この十年の歩み―」

・十年史以降の連盟諸活動の歩みを取りまとめ、会報第四十号特別記念号として発行(牛山知彦記)

入場無料

● 神奈川県漢詩連盟創立20周年記念
漢詩講演会

「美しい日本の風景」
——日本漢詩への誘い——

● 2026.10.13 (火)

● 開場*14:30
● 講演*15:00~16:30
● 会場*横浜市開港記念会館講堂

● 講師: 鷲野正明先生

● 全日本漢詩連盟会長
● NHK-Eテレ「吟詠」解説者
● 国士館大学名誉教授

著書: 「漢詩と金漢」(二玄社)「はじめての漢詩創作」(白帝社)
「漢詩の美しい言葉 季節」(源流社)「一舟で読む漢詩400」(源流社)
「舟で読む日本の漢詩300」(源流社)
共著: 「神漢」(源流社)「吟文典」(源流社)「日本漢文小説の世界」
監修: 「漢詩の読み方・楽しみ方」基礎、神人別(メイツ出版)
「中国の伝統色」(源流社)「美しい中国の伝統色と文様」(ホビージャパン)

*申込不要。講演会場においでください。読典になり次第締め切ります。詳しくは要項をご覧ください。

主催/神奈川県漢詩連盟 <https://kanisozon.org/info/shinkaruten2022/>
後援/神奈川県教育委員会・横浜市教育委員会

二十周年記念行事協賛金寄付者氏名一覽

(令和八年八月十日現在)

青木 美憲	川喜多 康	高津 有二	平賀 康雄
青山 正子	川久保普美子	高橋 純子	廣田 雅人
浅田 洸一	神田 英昭	高橋 光代	福田 忠夫
安喰真理子	北野ますみ	田川 行雄	福元 弘子
新井 直行	木村 孝	瀧川 智志	藤村富士雄
新井 治仁	神山嘉代子	竹田 勲	古川 彌
荒木美知子	小浦場 博	武田 利廣	古澤 公章
安藤 啓子	小島 数子	竹村 文孝	保科眞智子
飯沼 一之	五嶋美代子	田邊 実	前嶋 彩江
家吉 幸二	小菅 幸枝	田辺美代子	町田 裕子
池田 清二	小林 豊朗	玉井 幸久	松井 秀人
池谷 淑子	小林 迪雄	辻 寛子	松田 奈月
生駒 祐子	小森 香織	薦 清昭	松原 裕子
石川 俊之	最所 郁恵	長岡 真二	三浦 昭二
石塚 昌弘	坂本 慎治	長岡 巨知	三浦 哲郎
石松 和善	佐竹 信一	中島 龍一	水城まゆみ
磯野 衛孝	佐藤 一夫	中野 三琴	三井美恵子
板本 健作	佐藤 三緑	中野 幸子	向井 恒泰
犬飼 勇雄	佐野 輝美	中村恵美子	村田 忠和
今藤 洋海	塩瀬 正明	中村 講二	森谷 正彦
妹脊真理子	篠崎佳代子	中村 泰	諸星 暢義
岩村 順一	柴田 豊彦	中屋 保之	山口 智子
牛山 知彦	柴田まり子	中山 洋子	山口 幸雄
宇野 次郎	柴本 信子	成澤きよ子	横溝喜久男
梅村 郁郎	白石 信隆	南上清一郎	横溝比呂美
大谷 明史	杉森千枝美	仁上 恵子	横山 真吾
大森 冽子	鈴木 拓子	西山 友貴	和田 肇允
岡崎 満義	鈴木 正敏	橋本 孝一	
香取 和之	田内 隆	浜田 勝	
金澤武司郎	高田 宗治	久川憲四郎	

多大なご支援有難う御座いました。記念事業・行事に有意義に活用させていただきます。

会長 香取和之

あとがき

発刊にあたっては、鷲野正明先生から心温まる祝辞を賜り、厚く御礼申し上げます。

神漢連の十年史(会報二十号)を二〇一六年に纏めてからはや十年が経った。十年史の時は、神漢連の過去のことはあまり知らない、入会後数年の香取・久川が中心になり企画し編集した。

今回も、神漢連の「この十年の歩み」をあまり知らない世代が、神漢連の伝統・実績は何か、また今後何をすべきかという観点で企画・編集してくれることを期待していたが、残念ながらそうはならなかった。結局、香取・久川などのロートルが過去の記録を残すという作業になってしまった。多くの執筆者のご努力により、この十年の神漢連の歩みとしては、それなりにしっかりとした記録になったと思われるが、「この十年の歩み」編集の本来の目的に照らすと、前述の重要な点が残ったままになっている。

二〇一六年に神漢連十年史の編集を企画したときには、当時の副会長・故田原健一氏は当初は反対されていた、「そんなもの一体誰が読むのか」と。その後、田原さんとこの件で話すと、「過去を懐かしがっている暇があるなら、今後の事を考えその仕事をしろ」と言われているように聞こえた。流石に、神漢連を創り上げ発展させること

に尽力した人のみが言える言葉である。

この「二十年史」この十年の歩みの刊行が、神漢連の将来に吉と出るか凶と出るかは今は判らない。吉と出ること祈っている。易経の卦「天火同人」䷌、と「地山謙」䷎を玩味することを願う。

(香取和之、久川憲四郎記)

「神漢連二十年史」この十年の歩み」編集委員会メンバー：高津有二、新井治仁、久川憲四郎、牛山知彦、白石信隆、山口幸雄、佐野輝美、香取和之。



(本挿絵は、故田原健一作)

表紙の題字：牛山知彦書である。